

芭蕉袖草紙
天

中村俊定文庫
文庫 18
763
1





凡例

一 袖冊子とは、寛文二代の風流たりとやれ
れど、花書中にて、東武の人、秘に花
書、附くまゝとあせり、字、梓、よれ、本
り、ゆゑりて、おのれ、了、校、合、を、得、す、也
初、う、次、款、より、して、終、は、花、丸、束、り、
易、に、書、あり、は、は、めて、の、連、白、書、ぬ、を、海
ほ、め、り、と、は、は、く、か、へ、ち、れ、よ、こ、お、は、て
板、の、書、海、中、あり、て、白、字、の、解、し、く、と
た、れ、れ、も、十、七、八、を、数、ひ、板、を、一、つ、又
再、書、あり、は、は、の、お、と、お、え、る、う、う、と、
又、お、の、お、を、り、き、そ、へ、り、と、う、あ、れ、
げ、冊、子、一、つ、と、う、り、の、花、道、の、た、い、う、を、見
る、ま、そ、の、ま、ま、あ、れ、

一 連、白、の、う、ま、は、花、書、虚、栗、本、あり、と、梓
行、の、目、目、あり、と、ま、ま、白、の、向、は、お、み、つ
人、の、お、白、あり、と、花、書、の、名、の、ち、や、は、花、道
の、ま、ま、と、う、う、

一 服、才、三、は、て、の、お、り、と、早、花、の、お、ま、り、へ、
り、と、う、

一松島獨峰之圖古吹こ礼もそ彩好し
 多ふよあつらひは人考つ
 一いさゝかゝるのちりこちり拵るあめり
 一他者もこちりこちり拵るあめり
 去ちあつらひは人考つ
 一ぬぬの板りちりこちり拵るあめり
 一ぬぬの板りちりこちり拵るあめり
 一ぬぬの板りちりこちり拵るあめり

文化八年 未初秋

花屋葺奇淵



色蕉袖草紙上

浪速 花屋葺奇淵拔

延寶九年

次韻

晋伯倫傳酒徳頌樂天繼以酒
 讚青醉之續信徳七百五十韻

二百五十句

抜扱とらてん仕たい花まきと
 まうかまのてのまもあるへく

譬の足維徑もく 継そへて 桃青
 這勺以 莊子ヲ 可見 矣 其角
 彈骨の力たり、ふぬるまこふ 才磨
 きくく凡のねよにりし 楊水
 是よよ来て 軒をかこる 数云 角
 灯んくると 係しけん月 青

御雨り麻マ々々ののあるる角
 粟アヒと秤ハシさハシくハシ黍ホ示シの守ウ角
 佗フアヒ雀ハシ昼ハシ眉ハシ成ハシ客ハシふハシびハシつハシんハシ 青
 意ハシ悲ハシ舟ハシのハシ閑ハシつハシれハシくハシくハシくハシくハシくハシ 角
 風ハシのハシとハシ食ハシふハシ朝ハシのハシ下ハシ成ハシくハシすハシ 丸
 先ハシ祖ハシ成ハシえハシ知ハシるハシ客ハシのハシ夜ハシ語ハシ 丸
 灯ハシ火ハシ成ハシくハシくハシ出ハシ冥ハシとハシ世ハシ又ハシくハシ 角
 古ハシとハシめハシくハシくハシ鬢カツラ引ハシくハシけハシ 青
 武ハシ士ハシのハシぬハシおハシ成ハシまハシくハシくハシ水
 女ハシいハシなハシくハシくハシ子ハシさハシとハシいハシいハシ 丸
 極ハシあハシくハシくハシ後ハシのハシ花ハシつハシくハシくハシ眼ハシ 青
 んハシのハシ猫ハシのハシ力ハシ成ハシ肖ハシくハシくハシ 角
 鹿ハシとハシ藤ハシとハシ且ハシ易ハシ訓ハシ易ハシ忘ハシ 丸
 乳ハシなハシくハシくハシのハシ馨ハシのハシくハシくハシくハシ青
 水

春ハシ秋ハシ成ハシ花ハシとハシ倉ハシとハシ暇ハシふハシ丸
 白ハシ奥ハシをハシくハシくハシすハシくハシくハシ餅ハシ眷ハシ仕ハシ安ハシ 青
 寛ハシ平ハシのハシおハシ不ハシ人ハシ佗ハシ指ハシ合ハシありハシ 水
 備ハシ士ハシ松ハシ灯ハシ成ハシ柳ハシてハシ睡ハシるハシ 丸
 けハシくハシくハシくハシくハシ女ハシ成ハシれハシ声ハシとハシ 青
 血ハシ指ハシのハシ絲ハシとハシとハシおハシやハシあハシくハシらんハシ 角
 不ハシふハシくハシくハシくハシくハシくハシくハシくハシくハシくハシくハシくハシくハシくハシくハシ 丸
 獄ハシ囚ハシ正ハシ成ハシあハシくハシくハシくハシくハシくハシくハシ 水
 天ハシ帝ハシとハシ目ハシ安ハシ成ハシまハシくハシくハシくハシくハシくハシ 角
 松ハシ成ハシ極ハシてハシ星ハシ樹ハシをハシ極ハシ 青
 雨ハシのハシ握ハシりハシ風ハシのハシくハシくハシくハシくハシくハシくハシ 水
 秋ハシとハシ對ハシしてハシ不ハシ華ハシ堂ハシのハシ記ハシ 丸
 白ハシ靨ハシ仁ハシ子ハシ柴ハシ村ハシとハシ遠ハシくハシくハシ 青
 溪ハシのハシ火ハシ成ハシ朝ハシ成ハシ射ハシるハシ 角

師^ガ奥ハ諫め 鞭ハ指^リ改^リ別^リ多^ク 丸
 安^ク舟^ノの^所時^々又^ハ流^ル人^ノ身^ヲと^シ泣^ク 水
 向^テ後^ヲと^シ行^ク徒^ラ古^ノの^曉鐘^ヲと^シ 角
 拍^ヒ托^ス初^メ音^ノの^魂香^ノの^魂 青
 忘^ル人^ノの^往又^ハ似^テる^ウり^テ着^キ 水
 雨^ノ城^ノく^ねる^ウ又^ハ風^ノ々^々 丸
 夕^暮の^息又^ハ烟^ノ城^ノ々^々思^ヒ 青
 民^屋あ^つて^ハ後^ヲ改^セむ^ル 角
 笑^フの^木熱^ル草^ノの^野ハ^味く 丸
 又^ハあ^らか^らる^海波^ノの^古 水
 月^ノ又^ハ人^ノ言^ハ尾^ノ々^々向^テれ^ル 角
 表^レと^シ又^ハ城^ノ踏^ル 扱^キ 終^ル 青
 徒^ラ又^ハ一^ノ小^ノ社^ノよ^ハ何^トあ^らぬ 水
 朔^ノ々^々托^ス又^ハと^シめ^ルあ^らろ^く 丸

花^ノ又^ハ照^ルた^ハ神^ノ宮^ノの^奇持^ト 青
 幣^ノ又^ハ菓^ノつ^らる^ト託^スの^も 角

次韻

雁^ノ又^ハ雪^ノと^らん
 ゐ^まま^まま^まと^らん

春^ノ沈^ム又^ハと^シ橋^ノ石^ノも^とと^らん^{あり} 其^ノ角
 今^年は^ハ杖^ノ系^ノ我^ノ森^ノ是^テ 丸
 月^ノ城^ノ連^テ又^ハ坐^ス鳥^ノ帽^ノ又^ハと^らん^{あり} 揚^ル水
 笛^ノ又^ハ法^ノ利^ノ我^ノお^らん^{あり} 桃^ノ青
 お^ぼこ^こと^らん^{あり}川^ノ流^ル草^ノの^系杖^ノと^らん^{あり} 丸
 早^ク山^ノ路^ノ又^ハ砂^ノと^らん^{あり}せ^ける^角
 夕^ノ又^ハあ^らる^幕と^らん^{あり}よ^うと^らん^{あり} 青
 夜^ノ盜^ノ招^ル風^ノの^音城^ノ合^ノ又^ハ 水
 雨^ノの^園又^ハと^らん^{あり}て^ハ敵^ノと^らん^{あり} 角

舞臺は宋の唐打戸丸
 とひやう仁うの氣よ世成驚と
 丸とつゞきまののふし
 移さめ俺て雪の炉小根源温丸
 あ〜〜わいつく帳の紙室角
 女の氣うつるとまをて致すこく青
 若ら氣きあしてやうれ潤る水
 ストント柔入落してい令も角
 とうりあえ手ねあ仕る月丸
 秋の末つ〜と暖脈成成通水
 落の院の御凌成と〜青
 危何人舎人の花よからる丸
 み世の番成寅と致て角
 渾沌翠よ系て氣小好〜青
 スッホウ

朝嘆き〜むる廉くの山水
 吉原君代ぬと〜いさな〜丸
 捧軍勇やつふせと止つて水
 法きう寸の陰よう〜梓又弦引青
 富の屋成徳明王のち〜ま〜丸
 摩訶志美苦奈圓よ生ル角
 愛ヲ捨子ヲ捨毗盧遮阿毗羅吽音
 嵐と落て風とや〜ふ〜水
 夜の食乏〜〜森是々る比角
 蚪の舌と〜身と後〜丸
 月の秋うら〜〜の且夕〜水
 高〜〜〜心妹〜〜〜青
 どのり〜〜〜〜〜丸

繪と酒りりの奥そて径角
 小蛇くれば本松と帯さうそで青
 狛戸の神成齋モイ——系水
 燦掃之礼用於鯨之脯ホシ角
 中といの翁齒菜刈入丸
 風いそ牛とへ水さるるよ水
 荒屋よるの枯屎とく青
 おそろしく白骨のうみ付あさ丸
 曾呂利新信成漢は扱角
 禪小僧豆鷹よ月の詩を刻キサ青
 雷スリハチ急鳴て色急ス風水
 花の今朝キ返入羊成並切角
 橋よあそち成はるるとは去丸
 不帯スとい息ス去奉の雪成掃水

雪成返てそく夜とらるる人青
 風のからりの控よ雪未下丸
 山を踏とだいて矢りり角
 ぶのいふす人の地花よとめは青
 本槿のちふしと本麻の唇水
 細殿よ鬼灯の燈カ言乳角
 踊持衣の裾小なり波丸
 酒の月歩伽坊まのの棠て水
 志素流りやう奥の泉あ青
 仁骨のまよるれが成せやつ角
 石イひよまたえて蛇イと化イ角
 葉地ある根の底小車止ら青
 天イさく園の金振のそ水
 観江の成イ言イ岩イ号イ白浪よ角

青海蒼々いし懈琴と彈丸
花の名不^レ定^ニ旅泊^レ賞^カ
方^ニ秋^ニく^ニ東^ノ金^ノの^信青
淋^ニ瓜^ヲ蔓^マ又^ニ落^テ互^ニ依^ル
夕^ノ角^ニ空^ニく^ニ食^ハ居^ハひ^ハく^ク
枕^ノ本^ノ小^ノ蟬^ノか^ク泣^ハか^クに^森
松^ノの^清水^ハ其^ノ露^ハ其^ノく^ハ水^ニ
夏^ノの^身成^レ何^トと^鏡ふ^タも^て
我^ハ皆^ハ信^ハハ^レよ^クと^そら^レ
生^テは^く成^レ流^レ折^レて^ハ念^ハ量^ニ
沈^レ阿^彌佛^ト雨^ノの^火青^シ
牝^ノの^奥下^ニま^ウ系^ニ記^スか^ク
狄^ノの^里此^レ足^ハあ^ラひ^ハ鍋^ノ
配^テ所^ノ人^ノ等^ノの^心忌^ニ布^ニ成^テ好^ミ
青 角 丸 青 水 丸 角 水 青 角 丸 青 水 角

あ^ラる^ク老^ノの^菌辛^ニ螺^トと^松と^水
心^ノ地^ハや^ハむ^ハ細^ニ針^ト生^レ小^ノ舟^ノ
中^ニれ^ハ又^ニ尾^ノ多^ク花^トと^出心^ノ老^ノ
麦^野の^豊の^光成^テ一^ハく^ク
勅^使 羊^原の^朝長^ノ燕^切
秋^ノ成^レ啼^ク鳥^ノの^多成^テ庄^トと^し
夏^ハや^ハさ^ハの^人の^時島^とに^角
津^ノの^必れ^レ生^レ田^ノの^表の^初夜^ノ莫^ク
道^とま^たけ^よと^念接^ス水^ニ
霜^ト下^リて^又り^里の^御配^リ
寺^ノの^納豆^ノの^声り^と泣^ク
よ^レく^ハぬ^キき^接花^ノの^老と^泣
園^ノ炭^ノあ^ラひ^テ小^ノ舟^ノと^雨し^青
勝^をそ^レ洗^ハ我^ノの^清水^とし^角

辰よりかろれよ半函一たり 丸
 非の戸城人侍下女も麻忘れ 水
 歩をけりてよ眼をくく 青
 泪のよとほんくくと鳴るれい 丸
 千とせぬくさりの埋木 角
 美傳ひて寸龍花をむき 青
 如泉法昨うま力あり 水
 次韻

母よりて家より秋の世中 丸
 酒にく力ふかへる程 揚水
 めくれともか子い茶よう 桃青
 糸といひをたり 海氣 其角
 言れ客英の客とふらま 水
 後後の亭に歌を後 丸
 水

樂やりの隠て風流 角
 持よ好織とをせしてあ 青
 娘一と希女房のさいて 丸
 忘あつれたる牙子 水
 羞更て枝の板戸をこ 青
 括ゆく宿よ冬子うむ 角
 髪結の住り人 水
 草紙婆の男ゆくと 丸
 骨刀土急禱のまろ 角
 瘦たる馬の教よ 青
 内よと味ても心いきり 丸
 菜とく夏の耳ふ 水
 伝いかひて養子おたく 青
 在浅屋土とて 角

筆耕寸青磁の牛よ花付て 水
 燕菜の流くむら 青丸
 后宮れ最入車中よりふる 角
 緑たしや上の御若の極 青
 次巾が死さけて衣の雪踏む言 丸
 挑灯切て紫のうけろひ 水
 風前の角内と身成悟りくふ 青
 入りの山ふと狼よのり 角
 雷の斧下くしとそまに 水
 又去し龍頭の函 丸
 俗よい人麻鳥の海の底あり 角
 羽の目れ赤本地赤 青
 何故是て蛤の殻て着てら 丸
 ひそくくと雨養成ゆり 水

月松葺夕草の葉の月好 青
 粟刈 敷て團子下と 角
 後鶴の好いの殻ひしと 水
 水汲記で 青丸
 登りあう人の志のひてふる 角
 榎と子よたくやなるし 青
 古家の径き 青丸
 いたらの赤丸念風の荒ふる 水
 麻の葉よ出る小箱と打て 青
 かく枝さけふる生の浦抽子 青
 花にれくて清丸隣城信力 水
 明てと麻ごごぬうけ後と 丸
 豆羹の食たく粒よふき 角
 人死と待て生むといは 青

石、曰花のめでたく、咲にたり丸
 木玉に、なで風、杖、舞、柳水
 三 飛雨、急の流、^{ハナ}庭、空、^{キリ}青
 驢馬の進、^ニと、^キ鞍、^キ角
 大根の、糸、^ニ裁、の、^ニ実、^レこ、^ニさ、^ニよう
 雲の、く、^ニ鞋、^ニよ、^ニ文、^ニ付、^テや、^ル丸
 表、^ニや、^ニ大、^ニ桶、^ニの、^ニ櫃、^ニの、^ニ腰、^ニを、^ニ丸
 有、^ニ侘、^ニ一、^ニ床、^ニふ、^ニぬ、^ニと、^ニん、^ニ引、^ニと、^ニる
 も、^ニや、^ニく、^ニと、^ニ庭、^ニ入、^ニる、^ニこ、^ニと、^ニは、^ニを
 通、^ニハ、^ニ以、^ニ骨、^ニの、^ニ位、^ニて、^ニた、^ニと、^ニむ
 遂、^ニひ、^ニ一、^ニと、^ニ恨、^ニる、^ニ糸、^ニの、^ニ目、^ニの、^ニけ、^ニ塚
 横、^ニを、^ニお、^ニと、^ニ助、^ニ後、^ニに、^ニ一、^ニと、^ニら、^ニて
 今、^ニを、^ニ力、^ニに、^ニ村、^ニ風、^ニと、^ニや、^ニ三、^ニ味、^ニ線、^ニと
 や、^ニと、^ニ一、^ニや、^ニと、^ニと、^ニ死、^ニ後、^ニを、^ニ回、^ニる、^ニ丸

秋の、お、^ニ服、^ニ切、^ニ件、^ニ裁、^ニと、^ニい、^ニれ、^ニ丸
 任、^ニ持、^ニち、^ニる、^ニ一、^ニと、^ニめ、^ニる、^ニ葉、^ニの、^ニ戸、^ニ青
 面、^ニ白、^ニく、^ニ壺、^ニ曲、^ニ杖、^ニ杖、^ニひ、^ニ一、^ニ丸
 海、^ニ老、^ニち、^ニり、^ニした、^ニる、^ニ海、^ニ苔、^ニの、^ニ青、^ニ衣、^ニ水
 急、^ニ湍、^ニの、^ニ松、^ニの、^ニ娘、^ニの、^ニと、^ニれ、^ニ丸、^ニ青
 炎、^ニ世、^ニよ、^ニ子、^ニら、^ニる、^ニ雲、^ニの、^ニ神、^ニ角
 卜、^ニ同、^ニ一、^ニと、^ニ鷺、^ニの、^ニ糸、^ニの、^ニま、^ニり、^ニと、^ニ水
 蛇、^ニの、^ニ氣、^ニを、^ニて、^ニ草、^ニの、^ニ蛇、^ニひ、^ニ丸
 毎、^ニ源、^ニに、^ニ皇、^ニ居、^ニよ、^ニう、^ニれ、^ニ紙、^ニ帳、^ニ釣、^ニ角
 清、^ニ水、^ニの、^ニ司、^ニ麦、^ニと、^ニ糝、^ニ青
 い、^ニつ、^ニと、^ニ糸、^ニる、^ニ法、^ニ味、^ニち、^ニの、^ニ誓、^ニと、^ニ丸
 志、^ニ尼、^ニと、^ニお、^ニの、^ニ叙、^ニあり、^ニま、^ニり、^ニ水
 表、^ニ録、^ニる、^ニ拾、^ニ子、^ニ拾、^ニひ、^ニと、^ニ遣、^ニし、^ニと、^ニ青
 和、^ニ里、^ニと、^ニ麻、^ニの、^ニ裾、^ニ引、^ニて、^ニ入、^ニ角

松茸は道一ゆくの松茸水
栗の指は有唯のいざ丸
俣電は菘コウロキの青瓜あふる角
足袋とと宿に風裏と青
扇折る女の夏は捨られて丸
まの江戸は急わと色咲水
むしとそあさほるは徳とや丸
然ふる葉のふもとと角
おくに未と上るう陸る声細水
法眼うと一と成老待とや丸
宮造る意ウツの道ミチの名系と角
慶平は冠の櫻は折うけ青
綱ふる葉は扇のうらぬれ紗丸
故園今とと蘭照——水

丸

風の月熱の浄雪は鏡ゆる青
黄ふる小信の怪ととと角
山路ういららの心ととと水
篠の枝折は猿ととと丸
若葉の挿と深くととと青
気とととれ——人の抜ら角
血は端て凡と刀は折る言教水
古香はとととて理辺ととと丸
わられて花はとととととと角
孤ハ酔て酔醺とととと青

天和三年

屋栗

酒債尋常往處有
人生七十古來稀

詩のそんと年次食酒債其角

冬湖日暮て駕馬 鯉西蕉

干純と夫と雲成りてん

乙級人の鬼成泣し正角

力ハ袖かゝるに睡る膝正角

鴨の羽しゝる夜涼に蕉

恥ぢしぬ傍成りて蕉

雨 山崎 傘成り正角

無井のこてとと蓋に涼蕉

持場の雲よ志殿と正角

一の姫里の床およ蕉

斬名よたつと云歌と蕉

清も怒の霊と啼蕉

うさ世よ沈むき食の蕉

背ハ花負重し蕉

色蕉あしれ蕉

腐もろる蕉

鰥ホナこして藤蕉

舞入の近はく蕉

たつひやんて葛蕉

朝りそ蕉

黒銅くろ蕉

枯屋蕉

魔外と使蕉

鐵の弓蕉

帛懐蕉

心をく蕉

うはと火消蕉

下司后朝成務とて有と字
西此成後よ包むあやふく
長れいふ文殊形ゆき吹調人
みちのくけ美あしぬる日
武士の程の丸麻よふく
八声の約け雲成若法く
詩あそ人と花成貪る酒債れ
美湖日くれて駕典吟
天和三年

鹿栗

憂方知酒聖
貧始覺錢神

花より此成我酒ふく食區

眠とるを陽太の 瘦一品

鶴啼て青峰夏成晴るん 嵐雲

土

童子礫と子折る唐梅 其角
力成過と江の夢と芦割て 嵐釐
浪のそくまよたふと釣うけ 華
長鬘洗ふ雨より朝の雨よじ 晶
朝よ烏帽子成ふるよ紙衣 蕉
浪人の意と成あふる青けり 雪
やぶれ一ねよ入りひをふれ 蘭
夏さうら月一宗有成抱ひる 角
藤ハ退之の肝魂を奪 晶
雷鳥のその喜ハは角成鳴るん 蕉
夕てり海より 輕原る 雪
傾城の後成捨し并代り 晶
羽織よ角成浪を風流雄 角
仇し野々 権成出て料の有 蘭

破蕉 倭て詩の上^{ツク} 雪
 朝鮮^ニと西此と移る^ユ 蕉
 法^フと^フと^フぬ火の松浦^フ 掄^フ 晶
 めつ^メと^メと^メあけ^メの^メの^メ菅^メ 庇^メ 雪
 螢^フの^フ松^フの^フ五^フ 哉^フの^フ心^フ 蘭
 挿^フ入^フぬ^フ乾^フい^フ六^フ十^フの^フ荆^フ 角^フ
 所^フは^フ胡^フ 瘡^フく^フ世^フ 哉^フ 夷^フ 蕉
 人の^フ怪^フ 異^フ 摠^フ 長^フの^フ名^フの^フ魁^フ 晶
 松^フ 田^フ 首^フ なき^フ 雪^フ の^フ 暎^フ 雪
 とく^フと^フふ^フや^フ陣^フ 中^フに^フ似^フ 世^フ 軒^フ 角^フ
 山^フ 野^フ 乃^フ 飢^フ て^フ 篠^フ 哉^フ 貪^フ る^フ 角
 盗^フ と^フ 弁^フ け^フ 乃^フ 伯^フ 夷^フ 足^フ 洗^フ 入^フ 蕉
 とく^フと^フい^フ 武^フ 士^フ の^フ 憤^フ 州^フ 角
 見^フ くら^フ 記^フ 懸^フ 哉^フ や^フ く^フ や^フ 紫^フ 拖^フ 蘭
 主

笑ひさ人やお降る^ル 鬼^晶
 暁の寐^ル 云^ル 哉^晶 母^ル 又^ル 海^晶 以^ル て^晶
 法^ル び^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^晶
 され^ル 又^ル 柵^ル 廬^ル 山^ル の^ル 列^ル と^ル ぬ^ル 然^ル 心^ル 角
 柳^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^晶 函

草の戸^ル 又^ル 我^ル の^ル 夢^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^晶
 葬^ル 又^ル 我^ル の^ル 心^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^晶
 其^ル 角

深川菴

色蕉 世^ル 分^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^晶
 雨^ル の^ル 心^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^晶

世^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^晶
 天^ル 和^ル 四^ル 年^ル 貞^ル 亨^ル 政^ル 元^ル

歳^ル 家^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^晶
 松^ル の^ル 心^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^ル 又^晶

何葉院も花よ来ふさうさだに

二聖人の号よ

月花のこれやアとの玉蓮
かとききすハツキ二力ハ梅れささる

破屋なとらじつを風の声

まろりきいんや

此さうしんぶんよ風のまむり

秋十とせころつては屋をさす故に

両あつて山を乳をにうれり

二方へくれあ土をぬりおれしる

三上

友のの木槿はるま倉まきり

弟土川こそころりおれまの

泣あり倉もの扱てやりて

様とる人換ふよ秋の風いふ

杜牧う半行の秋ま小秋の

中山いさうりて忽ち

馬よ森で秋ま月を茶の畑

外宮市焼ふんをて

又うしもさき時のは風

志むらりて

二十日内おれとせの秋城く

西行谷

羊ありふ女あしあふ秋ま

ちりり旧里小志をて

路弓や路野色はなくさむ行の

高麻ち庭上のお城をん凡

千里とへるれん此情

よも仏強よひうれて天介の居
を中ねられると母よして

傍藤いく死つるけうの松

骨殖ある村に一本せうて

忍うつてわれは守せよ切つ書

西上人のよまの彦のりとい奥の

陸より二はうり分ちとさうし

の流水を今とさうしと書ある

家とくしとさうしとみふとさうしと書

後醍醐帝御後

中廟年と終て志のふけと志のふま

不破

秋のさや中二殺も富も不破の国

冬の日

雪の長途の雨は不ころひ袂衣の

ところくの飛ねもりたり権臣

なるまひ人我まへまねとさうり者

ねまの才士はふまなりしと公

ふとおりのひあて

狂う風の身は行舟よ似る卦

芭蕉

たそやとくしる雪の山茶花

野々

有明のま水又酒をつらうせて

芥

かーらの毛路とさうしありる

三

朝鮮のはそりとも死の匂ひま

杜

日のちりりし小粒又茶が枝刈

正正

我菴の露よやわうはらうりよ

水

髪と名をさうり成志のふ身の母と

蕉

いほりのつしと乳が青く控 五
こえぬ辛塔波女はとくと位 分
教法の本のつらつきをく火を焼て 蒸
つる一の多またこ一虚家 圃
田中おるこやんう柳あるところ 分
書よふぬや人のちんもり 水
たそをれが横よ泳むる有細し 圃
隣さう一よ所よ下りある 五
二の尼又近侍の社のはうりなく 水
襟はむらうふとくろり鼻うむ 蕉
余りおよ羞をく教おるあふ 五
いまそ眼の矢とるふつしあ 分
ぬそ人の記忘の松れ吹をれて 蕉
志を一宗紙の名を付一水 圃
五

空ぬきにを理も濡るお雨 分
冬うれふてひとり産 芭 水
志うしと碎け一人の骨信 圃
鳥絨は直はすの圃の古 五
あそれこの龜もいけ教云 水
秋あ一斗もつくとおそ 蕉
日東の李白う坊よ力とえて 五
巾よ木槿とるさむ琵琶抄 分
牛の泣とぬくぬまれ夕言に 蕉
箕又鯨の真成いこく交 圃
ころいのりめ才の星守むへく 分
守よの妹の眉くさには死 水
後ひとく居る湯に志が久の花邊 圃
廊下の藤のうけつこく 五

冬の日

おとへる壯年

早ところもと橋を

初雲のあつても橋をて帰る

野水

霜よちうこつらるの葉の食 杜園

おとあつてたつめる様のねをれて 芭蕉

うつらぬりれと車引りり 行々

磨よた袖よ弱教とつらる 重々

枕をよちお貞徳の富 正平

雨こゆる浅香の田塚のりりて 圃

奥のこころと死と只あはれよおく 水

床よけて寝まはいとこある男 子

縁さぬたけの恨のこりし 養

口とととと痛とちたか力な死 水

内月のかとことよ首送るせん 五

おこきに益とせしり 圃

方いほりれ 牡丹 盗 入 圃

縄あまのかまのやれ登るて 五

らりしとこのまに花切る町 兮

とけ花のまよと鳥嫁のいさし 圃

香いりりのまそらハハハ 水

梅翁よ候とらる 兮

うらむと死よ紙燭の 兮

藤ふらりけの掃の帯と 水

三味線うらん不破の死人 五

たどらるる 兮

紅とまんののこころ 圃

奉加りた所堂よ美金 五

いしらの傘れ下 兮

蓮池よ雪のふりよけしは雪
 空よもほろろ病やうたは
 力よたてる唐滿の髪集うれ
 意とぬ砥 藤 海とやう川
 秋 輝の 虚よ声きくきつこ
 藤の 実にはたふ糸ほろろ
 後より 硯 びひきき心陰に
 ひろりハ 典侍の 扇の内侍。 圓
 三ヶの花 鸚鵡 尾ふりの ちんぷさ
 ちんぷさいどむ 紙の 掲活外 台

冬の日

秋をいひし年
 ころろに十才
 けみひて力より病に集うれ
 杜

七

こほりあきりく水のいれき 重五
 齒爪のきば初特人の矢に負て 野水
 山の市門なれしわけの春 芭蕉
 馬糞よりよきに風のきうんを 荷台
 葉の陽者おしむ神の浦英 江平
 ころろたけは物よむ娘のつよて 五
 花 露ふくみよなきけりくさる 圓
 花 萩のこしやふ力を撰くれす 蕉
 蒼蒼と一青し 流 賀 樂の坊 水
 胡有夜双六うらの後藤とて 圓
 紅花買ふ屋よ時鳥さきく 台
 志のよちのここととて 能 成 作 水
 命 婦の 志より 采ふんここと 五
 肉 子よとて は 浪の 水に 流れり 台

佛 喰へたる 眞解さたり
縣トカヤふら 菰見次郎と作うれて 五
五形 莖の 島 六 反 田
うれーまに 鴨る 雲雀ちりしと 蕉
ま 魚の 馬の 眠と 歌あり 氷
おつとよや 矢矧の 橋の せらふ 園
て 庭 屋の 松と とうてい まで ぬ 分
於ーまに 柴刈 せふの ひつゝ 露 水
晦日トツカぬと むく 刀 賣年 五
雪の ね 呉の 園 せ ぎつじ ね 分
練よ 高尾の 行 袖 ぬ せ じ 蕉
あゝ人 と 指と 推よ 各 ぼ さん 五
芥子の ひとくよ 名 ぬ と ぼ じ 禪 園
三ヶ 月の ひり 晴く 残れし 色 蕉
六

秋 湖に けふ 琴う づ け 者 水
言いふ 多しと ゆりーて 敷と 取 多 園
声 け け 念 佛 教と な づ づ 分
か け け け 行 燈 け け 記 後 け 水
ね と ひ う の ひ と 夜 の 帯 引 五
こ くれ 花 た ま ー ひ ち ね け け 分
その 是 け 日 ぬ 我 と ぬ け け 蕉

冬の日

かまよこつふらー大焼家と
いさくけとれと

炭 賣 の お の り け ぶ こと ぬ ぬ ぬ
ひ くの 新い と 鏡 磨き せ じ 荷 分
花 蘇 馬 骨 の ち め よ ぬ づ づ 杜 園
鶴 くる 意 の 力 ぬ け け 野 水

重五

風吹ぬ秋の日籠る酒さき日 芭蕉
 秋織るかごと市に振する 羽笠
 かみ川や胡麻ふ代さや道
 いそぐの舞かうのの流 五
 ねりしと布搦るとなうとをれて 水
 けさとい女子紙裁る 三平 圃
 終られてくぬろろ響るれふれも 芭蕉
 火おぬ火燈かこんとえん
 門さの扉よ紙まわして寐る 五
 血刀うくを力のくさきに 圃
 雪おろて本郷の陸七つきく 圃
 冬さりの納豆ななくあくし 水
 とれ又位橋の轡ととてにける 芭蕉
 傍とのいとほ秋冬を 芭蕉
 完

白燕湯らぬ水よ羽かめいし 兮
 宣言かこく^{カサシ}叙と詩る 五
 八十年か三ツえり童母とちて 水
 なつたちとむる七夕のつゆ 圃
 西南よ桂のよれのつむむとれ 芭蕉
 蘭のあつふト本ら音 蕉
 然の家よ質ふる女とてつう 五
 物籠よ栗城は日^ハの言 兮
 名りきそねと^ハかさる^ハ云^ハなり 圃
 けくとも白る舟^ハさの文 水
 寅の日れ且と船^ハ治の疾^ハ記^ハて 蕉
 雪かう^ハハ^ハ南京の地^ハ 芭蕉
 いがれして^ハ陸^ハとも^ハさ^ハぬ^ハ像^ハ 兮
 阪よ^ハろ^ハろ^ハの^ハ侍^ハき^ハ前^ハの^ハ根 五

粥そふらつつき花よけり
秋夜の下ふ程入るもさう
山の方かくしと廉おやうて
藤らまぬる後山賣らむ雨

冬の日

田家眺望

雪かや鶴のいづかひか
荷分

冬の日
芭蕉

かき山家の体と本れ葉
重五

云死する牛の塩こほま
杜國

音もふき具足ふかのん
羽笠

酌とる童蘭切りよいて
野水

秋のころ旅の所連歌
蕉

五

新

新として椿の花の落る音
因

茶と糸ゆくとそむく風の音
立

雛子返る烏帽子の女
五

庭よ本曾作ることひの落衣
笠

おけりし山裾よ梅は
分

麻ころとくみの集あむ
蕉

紅を迫く獨樂居と世
分

我が出よふかかほら
因

たひ衣笛よ落ふ心
分

龜輿ゆらに本丸の山
分

骨はんとて坐よ洞
分

と食の義は世のい
分

泥のうすは引程を
因

所幸よ進む水の
五

水
 萱
 けー
 お
 静
 ち
 弱
 豆
 元
 伏
 と
 美
 水
 山

年の小角豆のまじり
 まりつゝは岩固流く白
 の小坊文よおひれて
 蓮の実より蓮の実蕉
 さふ飯巻のそくがけ
 風やわづら
 根ふりれたる尻
 能て母の昔より入
 の子の後も破れぬし
 木桶の種もれぬ
 りた男掃ひとて捨ぬ
 のさしけの雪掃ぬ
 下香白けけをのさ
 まるは月よ星のこぼし

世

冬の日

荷分
 重五
 杜國
 芭蕉
 野水

鶏面牛ひら
 火ふあふりりれ
 とくは外下忘に
 捨違よ言成
 銀よ鈴らん月
 ひくりに
 芭蕉

熱田三歌仙

あつこはるるらんくつさの
あつこはるるらんくつさの

芭蕉

桐葉
 東藤
 工山
 葉
 菴

海られて鴨の声何のふ白し
 串よ鯨をあひる
 二百年我は山よ谷よりて
 控の種やう秋は来よらう
 入る月よ鷓の音けりる空
 駕ふき國の音負是り

障雨の老るる母の涙うと山
一ツん嘆一昔業の念 藤
甚の工丈二日とらな目とて 蕉
周よ帰らと孤ふくね 業
霊芝何るの原とるに言がま 藤
善表元とるねの入り口 山
望きて衣の破れ綴りあ 業
秋の鳥の人食より 蕉
ねくひの程を此後かたて 山
夢の糸よ就成虫續く 藤
花思るる石の扉と押しし 業
笑人の歌おひうけろふ 山
帳夷の聲おふればと身と倦て 蕉
生海嵐子とふも袖八傷ら 藤

世

木の宵より西小所堂の忍向山
菽又葛屋の十はうりん 蕉
ぼつしと地塚はくろ祖父人 藤
糸よな言一痛の呪咀 業
不二の根とさきてるにまら 蕉
急より雀のひと山花らん 山
初るれは鏡杖志のひうん松ひ 業
衣うはく小姓菽の戸と押 藤
力細く耐斗の管八ツちりて 山
握いそく情かこのを病 蕉
破れとる具足松園ふさるる 藤
高麗の縣よ畑作りて 業
お深の庵紙よふれ書を授り 蕉
ちひとここの永と日れ伽 山

表の秋葉長藤をひきて 葉
青竹ちらけ藤の撮折 藤

熱田三歌仙

十二月九日一井亭

芭蕉

猿藤うら若の夕の夕月夜
庭とくせはくはりの雪一井

とやうくと見成あつ葉焼て 越人
紙濂成えよ所幸有ころ 昌碧

琴打て庭の上成はるいり 荷兮
障子ぬれはきゆる 灯 楚竹

記せして雪のふはひ怖れ 東睡
とこれ一髪汗ぬはひある 蕉

おけられて又うはるうとよ 井
乳と飲める子の我はゆるし 人
麻布と様ひるはる織ぬて 碧

芭蕉

蒲と取こめは糸をせはれた分
夕立の先よ雪ゆる雷のきり竹
馬もあつらぬ山懐の雪 睡
小雄麻のそれ美袖ふ耐付を 蕉
花あつら往りけれかり人
風よかちけて花のこつ三ツ兮
畠よけく世ハ遠かり 碧

病床

葉のひらいても花の枯れ 芭蕉

中あつら人のこれとさう
つくろひて

まきと雪とつひはをれ名なり
年くれぬまきとまき鞋とたふら

貞享二年

山家

徒知年々齒菜に経るるは

仔細くして

縁鳥古巢ハ梅よりなりける

京良へあつて

善如もや名もふれ山に相見

二月堂素花

あつてやふりの信光君のふり

系よ出て清流の秋風

る楚歌くみ

梅白くさのふや鶴とぬき

秋葉よふとく半ニツニツ 秋風

廿四

伏見西岸寺任は上人とて

あつて衣又伏見の掬れ

大はへあつて

行とハれに竹やうけ

湖あり

辛崎の松ハ花より

蛇り小島の葉門

はてまのたのたつて

〜〜ひまると

らさともは極まらへん

大顛和尚の正化

はてまの角へ

梅はて卯の花おこ

千鳥掛

和足亭

とす成

かきほくく我々多白の思ひあり
 麦穂かきよるうるほひの末 和足
 二りしてまきとる鳥ゆふれと 桐葉
 うさよ袖かきれい名取記 叩端
 夜ふれて力待厚ふうつ信ひ 葉言
 られとはりの秋の風音 自笑
 於うひて書ふ原に母を記 如風
 念力思成ころふまうま 安信
 通せ道の案に一喝示し置 重辰
 長者の興よ背成ふけい 蕉
 かく指成るふ下叙のうつふ 足
 岸よかそふる八百の 巻葉

廿五

森透は捲巻三つわをさる 臨
 又ねりよ秋の力さうしり 辰
 それの秋をふるよ打の悔ふ 足
 猫あはは猫舌晒れてりう 風
 多辺世小言とる女死まひて 葉
 新こめるをちかまき情を 言
 遊よ経冊付て新らたり 銘
 龜さうつれを脊負ふさう波 蕉
 天をさへ勅よ怒してまかひく 信
 五月の風のこや雨れとや 風
 菓子賣も木とられてはむ位とつ。 笑
 長尾の糸面たけ名知らひ 足

熱田三歌仙

桐葉亭

竹のふしにちやうとよし董竹

二七

あゝとまゝて極やあゝ 叩端

田原より妙の童のいゝかに 桐葉

とまゝと看うに井の中道 蕉

力まるる空の敷拍のふたぎで 端

酒のむ疾のいうにほーき 葉

双六のうりみ紙文よまろし 蕉

琴の凡とーむ袖あつり香 端

野の宮れあし妓王ちの紅 葉

くく持よとちなる州紙を付流 端

藝者ととむる名月の冥 葉

面白の拵女の秋の衣とくや 蕉

煙風とーぬし紅粉 四端

川原ゆく髪を角よ結分て 葉

舍利とる滝よ朝日うつろふ 蕉

かーこやう石の赤花の死シし 端

羽織よ酒飲つる撫 葉

ふつよとて女よ琴ねらうり 蕉

ゆらけ扇風の画よ洞くこ 端

守ふまゝ一笛のいろはをばり 葉

三股のふね深川の 蕉

菴住やいゝり杜律を味へて 端

花出ちる竹ここの草ま 葉

いふ写く百舌鳥い吹矢と負あう 蕉

あ汲む小傍袖いや、かに 端

力ぬてお抜い山と危たつらん 葉

そこの板盆の流うけむく 蕉

ひく雨のまゝに於たる馬の背端
ひく山鹿の尻冷ふ 青葉
釜見ゆる人の薄に立ちしれど 蕉
男やもりの老をくれしよ 葉
風うらた大卒の扱のせきよく 端
市門をたくく生狸の菱 蕉
常盤山を解しぬる志はて 葉
庭よのころ連歌所の松 端

熱田三歌仙

はくしと援のそれの袖にちる 桐葉

ひとり茶枝摘む菽の一家 芭蕉

白うけ山籠りの籠とわくまて 叩端

清水とをく入馬柄拍の力 閑水

面ふと世にぬる穀賣る村の上 東藤

せ

宿のまやけふ極子或極る 蕉
鼻紙又都の連云と付て 蕉
暮る大津に三井の産す 端
雪が侘ふ漢の焼く袖とんよ 山
藤より危の四五百の空 葉
松風の餐又何故吾はくし 水
佛を刻む西谷の 僧 藤
鳥羽玉の髪ころ女まは来て 端
急成えやふる朝鳥の力 蕉
秋はかたき味まお食ひりり 葉
白子のをまわらるの海 山
浪よとる鯨の骨小花極て 藤
陰月を於期のかつと道 端
笠持てかきこに立る瘦男 蕉

五重の塔のほろりうき 桂揖
 鶴鶴の尾と蛇の困に懸れて 端
 風よなぬおくく人の討死 葉
 箋とりて扑の度ふと引接め 端
 田舎ありの物見こらたろ 藤
 うちうのく前窓の香煙つじく 揖
 たられてとと酒買より 蕉
 根の稗よ鮎ねよう歩て 業
 おほん帰糸の時成と人 山
 韃靼のひくーのちけ為妻く 藤
 猿の栗の付成まひくそ 端
 譚唱てまこ佐柿の秋れを 蕉
 そ屋うけくまろの尾乃琴 山
 のとれふるま物焼て師の程に 藤

八日の跡れ星二ッ三ッ 業
 宮守の油とけつもくふの奥 蕉
 けくーのぬとぬまろ西行 揖

田子

牡丹葉ふくく分物蜂のかまか 業
 庵小うりて

なころもいすこ気成とうつら 業
 馬よは様さくるふ

秋をへて蝶もふうるやとくは 業
 ちて喰ひ芝てくひさぬ

年のかんくま 業
 うて友人の教も乃く人老のれ

貞享三年

古畑や茶つゞゆく男

初懐紙

日の暮ぬささくふ産けのゆきか

其角

砌よりきき去年の桐の實 文麟

雪村より柳えより輝きし 北風

酒の幌よりあいの 月 コ齋

秋の山も木のらけも愛らな 芳重

炭竈こねてきれ 杉風

里しの麦阿のさるむく縁 仙化

我のうそに雨お心ひせよ 李下

朝よりこれ之崎とちひ通る 攀白

念佛よねく信いつくより 朱弦

うそよりく連歌の興成るす 蚊足

廿九

歌よせまらむら松の声 千リ

有明の梨子打鳥帽又恙た 芭蕉

浮世の高成宴れん御の 執筆

惜まれし荷の本槿のさる 鱗

及後女きぬ 角

山ふらみ乳とのむ様の声 齋

命と甲斐の長も 枳

法の去我より髪と 杉

くろくろの記と 重

咲日より車 下

梅の小雨 化

二 残るる 弦

三 残るる 白

四 残るる リ

五 残るる リ

元たる眉狐かぐれさぬく 蕉
けー嘆てふさげにえゆる若菜 枳
葉さけの風又美崑切り又入 齋
おれとて下ふれけり 狐 鬘 角
あられ月夜のかくもる 傘 鱗
石の通鞍らの仿ふきすて 白
われ云代の刀より解治 下
永福の金乞へくおの風 化
近江の田植美濃又柳人 弦
とく起て写指よて人ほおん 重
およ京の湯の浦あはれ 角
ち筑紫きて人の娘はうて 下
弘勤の堂よれもひおぬし 枳
待春の鐘ハ墮たるまれ中 蕉

友よ小壺のおうれれ声 化
雨さへそいやーかりる鄙是 齋
門ハ奥丁と碓降の寺 白
理不そにわうふ武者空階 重
あゝおく牧の所石撰とよ 角
鷓の一声夕日城月に何たりて 鱗
乳の銘を秋さひれあて 下
いふは子の本のる誠は心色 白
はれかきこひしとせに美濃と 枳
人あきとひしり物かうつれり 揚水
さうりついとび金山のほろ 弦
げ國の武仙狐名あつ終にせ 角
京又汲とる醒井の水 齋
玉川やあのかく六のあまを 蕉

江湖しよ年去りにたり 化
舟の花のくれ精シラケもてあるが 重
升シラケうこうせいシラケをうとよふ水
南むく葛屋の細のまゝとて 不
歌と基成す屋のつぎく 鱗
候シラケ能る猶シラケの度シラケを打合せ 扱
贄シラケ又買シラケるく秋のころの 蒸
麻の音成おいてぬ人の中シラケの 發
小くは男の蘄シラケとてむ力ト
名の雨たもと七里をぬもん 下
伴約に内の冬れ川つゝ 水
舟車シラケをつく音のあらゝとて 角
梅シラケはさうりの院シラケくの 閑 十春
二月キヤキの蓬菜人もとととえすや 齋

世

婦ちり牛れおとれた日れ乾 重
胸あいに紙の端と織シラケひて 蕉
ねもひつゝくは落の刈シラケはし 扱
羨のまふ成まシラケつらみふせてたひ 鱗
木魚シラケここある山陰にシラケも 下
囚人狐やうて休むる物方ぬ 齋
菘と一シラケ出寸長シラケのけれあひト
回シラケ一シラケ時路と未シラケ小名狐付て 春
心ふシラケうらシラケ舞世シラケの憚シラケのわく 弦
三シラケ交シラケふむシラケよシラケゆシラケはシラケらシラケくシラケ芳シラケ吐シラケ心 化
あるシラケ一シラケへシラケまシラケちシラケのシラケ草シラケのシラケぬシラケれシラケぬ 下
十頃シラケ塚シラケ成シラケるシラケをシラケれシラケぬシラケやシラケかシラケ人シラケは 鱗
徑シラケよシラケみシラケふシラケらシラケよシラケあシラケらシラケれシラケうシラケつシラケく 重
井シラケふシラケるシラケ筍シラケおシラケよシラケかシラケらシラケおシラケやシラケて 白

梅さく 薺小町ひふりり 齋
 ちり雨またしの灯ふれ消えぬ 峽水
 鮫とらぬの仲も 薺に化
 伴勢城ふる方小朝日の有る死ト
 捧えりよて搦 造ら秋下
 信長の治まる代かきあらん 揚
 居士と叫ぶくわく玉の児 鱗
 紅は牡丹千里の香城かて 春
 雲とむ谷又出る温泉とす 峽
 岩根ふく重地か城底に 角
 わく一巾と舟の若法地とも 齋
 途の急す一か城か川小庭さく 化
 管弦城さす夜宵ハ位らく 重
 足寄の鹿山又泊る津一さよ 揚

世

千声とあふる 観音此所名 角
 船いくつ涼とあうりの川傳ひ 枳
 尾長にすくゆる水の急く 峽
 麻むしるれ七有にちなる 白
 連流らりる表をひさし 白

一ツ橋

芭蕉

花咲て七日鶴あふる 林麻うね
 懼て蛙のこころ 細 搦 清風
 足踏木城まきすこ氷る 峯を 攀白
 采をけ外城えくゆる 冥の戸 曾良
 名方と隣ハ麻たるまま 工齋
 枝又くく一か城の葉城うら 其角
 墨衣あふへむ一の壳落て 風
 内外の下向志川ありり 白

さらふまに付子の佳いつのり良
 一夜のちさう後うはけさる 蕉
 松のま敷えんしのよるの 陸角
 生て捨子の水又流るく 風
 新うとちあられぬ敵を世に敷取 良
 ことりのの鉢成おりの山寺 齋
 雪成るもの控やさつに寄きて 白
 虹のちりり日も白ひれき 角
 志つてい温る成さるす力に 蕉
 三つれ麻のいつ久成負る人 齋
 勢くくと軍にまある敷さる 嵐雲
 男かうくの白粉とぬる 風
 篠琴に明の風粒成忘れさる 角
 ねさささうく牡丹あつて 白

耳うとく妹う告さるるき良 蕉
 はれかき兵隊に茶を成さる 良
 札焼て刀はうりの傳へる 風
 我う川壺と殿の所拳角
 猶もとちお敷やさく通きて 齋
 糸の力夜の吐涌るらん 雪
 あとれくお中む人のひねは 白
 眉ぬく袖の翠簾はらふき 蕉
 唐の書よりのぬ不成うちやうて 良
 ひとりの買よ雪の山通 齋
 あふれさの名をふ控一破れ細 風
 竹やうねくて塩やうぬ浦 蕉
 相國の極路ひんぐれと松 角
 車成あつて妻のやとくひ 白

山さくく尾ふくもの先ふくろ
古池や嘘をこひあひの音

三日月日記

破風口小日影やよりの夕をこみ

芭蕉

煮茶 蠅避烟

素堂

合歡 醒馬上

かこふる小田の水落をあり

蕉

月代見 金氣

堂

露 繁 漆 玉 涎

張旭のおかこふる醉の中 蕉

幢とた右にこくるしりし

挈 帚 驅 偷 鼠

世

堂

ふるに都は強る所 壺を蕉

ふろくぬ首かこたる杯の換

乳とのい捺は竹と夏と心

舟 鉤 風 早 浦

堂

鐘 絶 日 高 川

乳くろく早苗の泥はこもて

蕉

合ハすけぬ板を火の氣

詫 教 三 社 本

堂

顔 使 五 車 塙

花 月 丈 山 開

條 茂 林 けく 志 の う ら ひ 寸

蕉

剪 銀 鮎 一 寸

堂

箕 面 の 序 や 玉 と 兼 ら ん

蕉

朝 日 う け 頭 の 紅 と 如 や し

風殮喉早乾

よつれつる黍のまらけく秋きて
内い火くぬををの夕月

霧籬顔執與

霰浦目潜鳥

ぬく人忘てまぬ小何るも聲
まをれぬ娘の珠枝と服に

山一伏山平地

門一番門小夫

鶴一鶴窺水鉢

ちねよりりてぬるをやけ
真より初ぬのまをにえとを

臨谷伴蛙僊

元禄中終

世三

其袋

夕照

沽荷

情冷の壁紙かゆる西日くれ

淵底くくふ草の積れく

雪の外の鐘とるくゆる松を

雷よととやうる石あのを

入存のうに化粧たる武老ひり

柴の真よま筆とあやとる

山寺の屋も狐のさぬて

花を来やと酒造るし

ゆふ平庭日くくはる菊の露

白ね胡蝶の垣と花紙す

結張紙標のたよとらうひて

乱ま一繁紙並とか人に

露

洞へかた記念の竹と青も岩
竹も焼火よみれ垂し〜
捧の月一ッの雲に傍腰て
淡つき深〜裏の救うけ
みいほくのあのを磁や鳴めむ
四十雀〜と凡も身し〜の
嵐雲

麻生山の方より

夕雨〜ゆる小は禁断

根ちる小若る人〜と涼省

寂羨せ〜ひと〜と志ハ

ら〜法詩のや成た〜る

竹〜り

寺は藤て〜く〜なる方足部

皎の〜い〜く〜鳴〜る

方とやし本す糸雨松持あ〜
雨よ藤て竹起〜る方と乳
雲折〜人成ちをむる方足部
曾良

船中〜と

四月のや廿七夜も三日れ方

深川八亥の件

未買よ雲の袋や投改中

雲〜るら

夏より〜けよれもの〜せ人雲丸け
年の市孫香買よ出〜るや
月雲このさけ〜らし〜の〜れ

百の年

嵐を〜い〜く〜る正月お種

雲〜るら

後やうのすゝふ似てうけとせ
うゝこれいそ花さく垣根りれ

老慵

牡蛎もろも海苔をら老ゆもせて
ふた日も静かたぬを存れ
系中やものもつゝ泥鳴る存

物皆自得

花よ静ふ花ふるひと女雀
花のそと静い上野の法師

其角の母五七日

卯の花も母ふと若とすま
夏に來る母もくすう郭公

其角

荒雪の後に

新二月と下ふのまふりれく

名月や池をめぐりておもす

句例別

橋泊よみをこえてよめ
花よこころをこえてよめ

露沾

時の秋より一のぬこり一旅のこと

原をともぬえ風雪の力 芭蕉

山陰より刈田の秋の小さうて 沾蓬

民者遊はれり一早川の水 其角

暮るくふをにほりては横雲 露荷

あらしぬ窓に枝取く 相 沾荷

傘の脩状去くかへら傾けて 芭蕉

あらしむく一神山の民 露荷

暑き月れ汗が悲む猿声 沾荷

とて一戸の蕪りたる 沾蓬

けりそは五天のむし法もぬく 其角
髪ある傍は陸撞せす 露荷
意とあつ鎌倉山麓深し 露沾
去はる杖とよはし風葉 芭蕉
月清くうらまはるるの輝 沾蓬
寄成法うみて雑細くも 其角
花受て人くまの草の唇 露荷
顔板ひらく山吹の指 沾荷
伝法活やたら映の春さそ 露沾
馨くゆきを帰る道 沾徳
拙の系に我文集と書終り 芭蕉
弟よゆきと書あれさうつき 露荷
あうけい志のひ安記も有略て 沾荷
琴成守とる 扱の 葉 沾蓬

廿六

馬成下りて野後やう林村家 沾荷
九輪指とた尾上ころけり 露沾
風の音なるぬ換後のうらさく 沾蓬
大は意たる意の雪 扱 芭蕉
身もれく抱の孫さふさふ 露沾
ひらり簾紙編くうに書 沾荷
一軸の形又の連歌集よき 露荷
名成紙ぬき紙の紙ひ 露沾
面うけを鏡よむう男つと 沾蓬
みくうの月るわく振子聲 沾荷
纏織る花のふしにこのまじりて 芭蕉
柳一のふれとこころる 筆

句性判

濁子

心もさくふらうらん参時由

薩埵のまねいづるる方 芭蕉
 貝ひらひくりの破ふきて 嵐雪
 酔ふこい人の肩にとりつく 其角
 夕の空のわいておけりもや祖空 蕉
 根お苗放輝のわくくも子
 休の抱きしめぬ板中も子 角
 とれし入帆のそゆるを根 蕉
 世の中成畫よの、れら葉の洞 子
 殊うかいらの産福も子 蕉
 死念こへ命の切のそくも 雪
 夏成占さく国朝 風 子
 津の空のまにわくしとお賣て 蕉
 二夜とさうのほくし侍 雪
 一老の連歌なとむけらに 子

秋元

苗代とある雨と梅とあり 雪
 響の栗のいづくたに足遠て 蕉
 弥直下りこいるまゆみ月 子
 夕陽別
 志らうねい蛤とりせ雲夜の撞 杉風
 一羽さうふ、千も一解 蕉
 枯るまよふりしおのみりて 曾良
 田中の道の通了くれり 依
 舟細くこる家いしれ馬 匠
 秋風あつら門のはし 水萍
 霧の糸線ととほと松の音 風泉
 雨よいせし葉のきせ飾 夕雨
 猿まらゝ女あゝの情はと 苔翠
 秋風うけぬかくは明の 筆

夕陽

山に霞をくもる夕陽

李白

火爐の葉又傳説はぐ人 芭蕉

松風よそれたる野原のけしこ 漢石

朔雪はくもる温泉のふたり 工齋

鐘一ツ三ツよかろうふたりの声 其角

苔の権月もゆらぐれし一み 卜千

縁子ともいたる塔の松とけし 嵐雪

餅二つさくはなすくもる草 白

名所の土境よ子月し松風人 蕉

強うぬし有て飾りとう宮 石

妙不

空を指を引つゝまはるやうなうら 其角

甲

續虚栗

十月十日

芭蕉

猿人と我名よもえんくの時雨 由之

中くはく人ふ松若くふしそ 其角

鷓鴣のころろけとせれたのみに 其角

狼狐かたる山陰の鶴 松風

かけあうくま生れ露の清なる 文麟

秋らしし舞臺力に遊ぶや 仙仙

中の秋画工一はれ帰るく 魚児

鯨こらうしておろる溪 船 観水

井垣や次方にひくは波のひま 全峯

齡と母狐しれ月つる若松 嵐雪

酒のそにこころはまのぬらひめて 執筆

卯月の雲と揺るはくもる 蕉

舞はる袖はくろく早瀬川之
麓一面よのころ橋・抗角
たまらぬ里なきはたかおし
月よやふらん海流の麓人鱗
蜀翁とく句ひもたふつとく
たもてぬことか風よ傀 假峰
途中おたてる車れを巻か巻て
沖こくおにたされし 誰之
花もよよ名のはく浪をたし
あつとつとつ居たつとつ
須の岸よとつとつたせの介に水
萱のぬけぬれ雪か焼 家化
老れ文の従ふよはよはつとつ
云 流とれしあとの冥守 蕉

防雪の下流のねかかそつ 白
命かたもへ船よ送らん 鱗角
起出てよ水たつらん海のよと
あつとつとつ御寺たのむとつ 水
舞やぶるふむ板の目ねしは北
小畑といしと素山子伴らん 風
まて戸の馬か酒債にかとられ 蕉
はの見える星か妹にとつとつ 白
薫のまわり面白くつとつとつ 化
幟とさして民の天王 角
所牧野の笛吹ふらん童声 峰
傍くるるはく腰にたつとつ 風
見えくしとつとつとつとつ 角
標のよつとつ蜀かあつとつ 雪

隈もあやふ居せぬ交はん
水
谷は出て海若すくくは
蕉
谷深き日くは死の本目
白
声きくられたるくは山
之

三河吉田歌

おど焚ても拭りつるま
死

子守歌

鳴ゆ本原業言亭よと
死
死を平殺まの君お成へ
と誦てたやうに死な
死

東よてい海の中空や
業言
ふもろ志もくは海の内
業言
小輪ふりたやうに神い
知足
酒気さむれいづぬの風
如凡
引捨し琵琶の囊と打拂
安信
僕はおくれて牛いそく
自笑
ふらふらと反哺の鳥鳴
重履
明日の命の飯りやう
立信
わたりふねもめうに心
笑
種いくふくう東の
蕉
こころこころの後も一
足
ふらふらとて鄙の橋
言
髪はゆる悠のあふれ
蕉
身は癒出て秋の寐
風

待差れおよむとことたりぬ信
揚枝とこゆく人の力あつそい足
小徳しそつ風の風をいひし下
ころあつ福の子瓜拾てり信
ふれ年板どうて世もやこれ足
父のいくとと起やしの夏蕉
お陰よとこくまある波の声笑
翅とぬるふ鳥一泣りひ言
あつつふる飛の朝日とたごて信
とまほしたる物のかりけ
山ちり車よ削る木公存ひ
極ふらして岩我寺りく足
洗はれよ行ぬ法の朝嵐風
極うくふく草れ草ひく笑

殿やれと力いむうしれ孰れ言
をいひ極うころもうのそ蕉
ふれうしし楯のそうけうける辰
陳のりり屋よ巻紙つるる信
ふ文によととりぬせるふれ御風
そふたをけかん所を鳴^{イニキ}ケ足
くれ盛り文紙あつしる空国こ言
所地うくする神垣の梅葉

よき掛

子供の後のたれと
望ちいぢのうら日

星崎の言哉とや鳴^{イニキ}樹

おとこのよる誓の煙火 安信
假山のふくれは梅と極うして 自笑

けろふ子猫たまに逢は、知足
 夢のうき世とまふたれなむし、業言
 畏のこれこの世也青死風如風
 一里のそら母なる河川上重辰
 廻さるめて門をくひこる言
 市は出て去りて心成ゆえ乳足
 牛は乳みてまきささる信
 叙白のまきすれり我ひいさ風
 力成ほりたる蟹貝の河蕉
 たり細く甲成りけて秋の風笑
 わく初なる宇治の橋守風
 産能る西川谷のあられしく足
 啄木もたたく杉の友枝信
 吹花よる魚釣の所成忘れり辰

甲辰

ふも履とよての法けし足
 草螺うらの膏ふるる落氷風
 角あり眉成化粧もるお蕉
 やうきのみと喰とく松の内言
 凍られぬまよ松ありけい風
 照あくて配ふようひまきさまん信
 庶子に懐く家つらお足
 式日の日わかとぬてんせく風
 後まよ采の出る川辰
 探上願ふらるるま蕉
 笠掛ありけい管中人の乾笑
 ころ力よ外里れ婦の行通足
 すく埃のやうひく止刑袖ひく蕉
 朝香につききり鶴の嘴あり辰

あはれぬかちらぬりしを
氏人の庭園多記未はり
外興發むれのまことさ
田とうとあさうねの
うたのわよ種さかす
雪の花

熱田の社所院後あうれ

塵連と後も清し雪の花

石くく庭のさむきあうらふ

竹しの松並落る風やきて

我燈隔る心のけりひ

秋くれて月さき墨れ一ツ家

枝よ醒ひし庭さひのわ

枕さくちあひぬ法と襟にけ

芭蕉

桐葉

兼

甲五

こけろく鬢の思を別力蕉
明くくる程ぬをむぬいさし葉
破色し心の境ちる庭蕉
古畑よひとり生たるまうて葉
おとく声や聴ろころし人蕉
おのよ飯音ひり秋の風葉
まもようさく衣さる力蕉
熱中芽れさめこそはゆある葉
温泉のうえて人もささり蕉
け塚の女のむのふにたれ葉
たう泣敷紙嘆るけりそ蕉
朝露にくすれて寝る寝れ声、
ゆうく下る板れ糸かけ葉
水濁る里の河系くすみて蕉

あししふまつむ刺の砂除葉
しり雲袋ふくけそ起並り葉
物衣袋ゆくふくそ起並り葉
野うへて経積糸とまらかこ葉
汐越と岩のうられあしりれ葉
おちうむねも似る遠近て葉
縣の聲のまう目なる力葉
あま山の伏猪城若る所よ葉
道一とち城州ふる萱葉
優婆塞う所廟といひる文讀て葉
落人記を扱ひぬにきり、
煎茶にぬれ茶いぬす雨の青葉
水桶のゆる惘半くこふ記、
西行の辞よあふぬ花とれて葉

夏の袂は靱うりなり葉

伴長古崎の南の海の果てを尋
のけりめてこふふとさう

春のつらけてうねいらさけ

杜ふさるる

されいらさけられさかたの宿

鉄る

けららの氷ふくころあころれ 杜園

千も掛

いらつと啼よりうらあひ
孫のあこれまき

焼飯やいらこの言にこぼれん 無足
みさむりし我足の 跡 こそ
松をぬく力よ思つ子日しと 越人
いほり烏帽子の脱るころ風 足

膝るやら馬の歩けぬあはれ
思ふは心ゆくはあはれ
千人掛

寂照庵(とせはるがらす)
荷今

へくは葉とれはと袖も後
旅の森のまこととあはれ
けこの月かゝる小石は
折のれとりに野菊折り
千人掛

寂照庵(とせはるがらす)
越人

道は及やとてた松も思はれ
雪がとてふすねとりの松
海印のみつ鯨とにらる貝吹て
脊をうり垂に端このは垣人

里

分よせんは名月成たて小やと足
昔の麦の貢城通と屏と蕉
冬園扇

とせはるがらすと足事小
如風

りつとて中落ふれとりの名月
階士の薪とよれる冬梅
所車の志とよれるとや雪捨て
跡は枝よりは中月
美中の声細き萩の風
かこのとてた友の縁庭
窓壁のこころと外れ建
妻うかつけいよこつ
本綿機くつぬ月よぬじ
とらん佛のこころはく
足

如風
芭蕉
安信
重慶
自笑
永足
業言
信
風
足

あつし雲霞かて故郷の山(山) 笑
扱てる鶉の啼(う)る見ゆ 蕉
衣(衣)履(履)ひ藤(藤)袴(袴)よ冬(冬)杖(杖)杖(杖)して 信
膝(膝)けし(膝)の軒(軒)よ(膝)る(膝)る(膝) 辰
秋(秋)や(膝)む(膝)う(膝)こ(膝)に(膝)か(膝)た(膝)る(膝)客(客)も(膝) 足
ま(ま)し(ま)ま(ま)る(ま)る(ま)ク(ク)ノ(ノ)草(草)の(の)つ(つ)由(由) 風
あ(あ)れ(あ)と(あ)そ(あ)衰(衰)ま(ま)て(ま)あ(あ)る(あ)花(花)陰(陰) 信
腹(腹)さ(さ)る(さ)る(さ)の(の)ま(ま)ふ(ふ)つ(つ)か(か)り(り)る(る) 辰
采(采)り(り)よ(よ)ま(ま)れ(れ)あ(あ)る(る)朝(朝)す(す)と(と) 蕉
ふ(ふ)の(の)こ(こ)う(う)し(し)ひ(ひ)と(と)は(は)む(む)葉(葉)つ(つ)と(と) 信
我(我)急(急)ハ(ハ)岸(岸)城(城)を(を)つ(つ)る(る)一(一)つ(つ)松(松)風(風)
う(う)と(と)名(名)と(と)せ(せ)む(む)る(る)さ(さ)波(波)の(の)音(音)笑(笑)
り(り)の(の)こ(こ)と(と)小(小)の(の)橋(橋)の(の)流(流)ふ(ふ)に(に) 足
琵琶(琵琶)よ(よ)あ(あ)り(り)れ(れ)成(成)楚(楚)の(の)歌(歌)の(の)よ(よ) 言

色(色)白(白)に(に)有(有)髪(髪)の(の)僧(僧)の(の)こ(こ)ろ(ろ)も(も)ま(ま)て(て) 蕉
あ(あ)そ(そ)に(に)似(似)ら(ら)る(る)岩(岩)多(多)く(く)み(み)あ(あ)け(け) 辰
抱(抱)引(引)舟(舟)代(代)の(の)け(け)だ(だ)の(の)う(う)ね(ね)ひ(ひ)山(山) 言
け(け)ら(ら)ま(ま)る(る)舟(舟)勢(勢)の(の)浪(浪)舟(舟) 蕉
貝(貝)け(け)ら(ら)ま(ま)る(る)舟(舟)勢(勢)の(の)浪(浪)舟(舟) 辰
糸(糸)履(履)よ(よ)や(や)あ(あ)み(み)鼈(鼈)の(の)や(や)う(う)つ(つ)虫(虫) 信
旬(旬)と(と)そ(そ)体(体)に(に)挫(挫)た(た)る(る)葉(葉)う(う)て(て) 蕉
母(母)の(の)い(い)の(の)ち(ち)と(と)れ(れ)や(や)あ(あ)ら(ら)る(る) 辰
羊(羊)鳴(鳴)そ(そ)の(の)啼(啼)の(の)あ(あ)さ(さ)ら(ら)し(し) 笑
外(外)山(山)の(の)花(花)れ(れ)や(や)あ(あ)ら(ら)る(る) 足
日(日)ハ(ハ)永(永)く(く)雨(雨)の(の)あ(あ)ら(ら)る(る)た(た)ら(ら)る(る) 信
丁(丁)の(の)名(名)残(残)さ(さ)は(は)ひ(ひ)く(く)た(た)の(の)く(く) 言

昨(昨)是(是)十(十)日(日)名(名)古(古)屋(屋)下(下)り(り)故(故)郷(郷)

いらんと守

福探してこゝや字せはとく掛

扶実板とてさうり落さう

歩行あつた掛つと板と馬掛

ぬる里や孫の孫まなく年は暮

貞享五年 元禄改元

元日森とこれとま

二日ともぬうりいせしめ花の玉

風麦亭二句

まゑ立てすと九日の遊山うれ

あこくその心いーらば梅の香

山家よりふらふて炭のうり

ふたくものあうりあーたあこ

香又匂へうに不る思の梅花

うれまやまゝ陽炎の一二寸

石波の底新大仏の膝回

大出又陽を高一ふれく

蝶の公の即座こそ

はまくのこしねりひさす掛掛

いせうて

神垣やねむいもかけすねん像

神垣のうらふ六梅一本も外

又ま鉄のうーうん一ふうり

所又ま子の一りとゆりし梅花

咲きた次捨の中より初さうら

景清も花又のたよへせき増

鮎竹菴

花城名小はしめ強や廿日狂

徳之日

以経孤花又礼りみけ

わづこ誇るそ突垂し杜
ある我とけよ童ふり
道の伏くあんとさう
万葉丸と名のる有途の
つれふさげうらに

乾坤無住日行三人

おれそ掲るそ捨る

若耽りて我もせうと捨る 五葉

丹波市

草叶て有るころやふちけ花

初遊

美の夜や花の人中り堂の隅

五

夏語しく僧もそえたり花の雨 万葉

無時

雲雀うらうへよそらふ時が

ト一遊

花はうりぬ日比の朝あけ

まじくくいな花のうへあふぬ秋

昔法水

夏雨の木下ふつとよ一つくお

西阿弥

おろくと山吹ちるる山の音

うらふ

花よあけり神の歌

高野

父母の志まうにまじり終ふ世

いふ花にふさし 夏の陣 五菊

秋款浦

ひまふふらつれしを返付ら
ひとらぬいてしるふらぬ衣の
よれ出て布子賣と衣の 五菊

奈良

催佛の日ふらつれし麻子

眞磨

流るる世の久しにふくせ時を

は流るるいふらつれし

蝸牛角ふらつれしよ次戸の石

ぬるお伯

梢はふらつれしとれさ夏と夏

湖の

五月雨ふかれぬものやせし梅

ふみろ牙まうらうとよて

去来にまうらうとつら

ふき人の小袖もいさや土用ふし

ふのうらうらく清る雪の 素

長良川賀を山氏水棲

けあさう目にはゆるしめし

物釣えよ出て

ねもろろてやうて想ひ物

物をつらふ冊とほきてさ

声あつた船もつらふ舟

何卒のこととてふも似すと日

秋の目

七月廿日竹葉軒在

芭蕉

栗禪よと日くもはらぬ世の夜

菽の中より又出る青材 長虹

秋の雨がけ物さあ言かけて 荷分

力ふと祖風まよる山あひ 一井

ひたろーと人のやいひるさよ 然人

昔未おとりにて屋根たまたり 胡及

本の系ちる板のこも神をた 氣彈

待つうぬる此の答もの蕉

遊るて故の鳴声又眠られず 虹

これ又物人や妻おとろへ 兮

あはけをまよる髪れ冷しぬ 井

死てるもかよ玉あるあり 人

乙莖のちくつれ出る夜れ者 及

五三

羨城くむとと藤ぬ流ち 禪

火ふつして燄るとのこい竹若と 蕉

白きたれもとのえ出る輿うた 井

雨乞ひとふし花のうらほひ 兮

竹結るるる彩の連さや 虹

日和さよりの氣おのかしと 兮

本馬車して子も夢にたり 及

とまき下敷つちけてかゝる 彈

切菴たつりけ凄れ夕くれ 井

さやりの香うらるるなれ 人

人一代の急城さよ 秋 蕉

控し世の恨も引むし 虹

さたかくなれと顔もほのほ 人

懐る服着さしてまよと出る 及

下戸をふくめる雪の夜の亭
早咲の梅を我々にたたり
嫁せぬむむめ眉かてある
志のひきよまそうれは
踏とやさせらおのこは
明やとたぬと満とさう
何れか鳴りぬとさう
花より硯の蓋ふおぬ
羞らう出とさうのう
紅 彈 蕉 兮 人 及 彈 蕉 兮

はらけの月とまれば
朝ふの酒かりとまれば
送れつおらうつとまれば

又科の月二人よれば
撥や命ぬとまれば
雪とれておの目もさう
姨捨山

侍や娘ひらり泣月の友
はらけの月とまれば

月くけや四門四宗もた
十六夜もやと又科の歌
吹とするは海方れお

曠野

深川の歌
雁人
石のぬも志つのにすかひ

酒さひふらふ世にの 月 芭蕉

藤まわつ後夜露は露は 夢つらん

理をふられたる秋のう言 人

瓢箪の大きき五石はくく

風よ吹きてゆる市 人 蕉

ふよこも長安はこれ名利の地

医の多きとて目も方はしれ 人

いそぐと降きのそに立出て 蕉

ひくく世活やく寺の経より 人

は里小古と云蕃れ名は傳へ 蕉

足踏もつせぬものけはの 人

そぬくやうやうかほそあやう 蕉

風ひき終ふ夢のうはくし 人

手もつらぬ道の山根もよきぬ 蕉

手

ものいそぐされ毎路こころ 人

月と花に良の高根とわくで 蕉

雲蒼とくはるころのねぬ地 人

破る戸の打うち付るまはれ 蕉

えせの淋しき麦の挽割 蕉

家おきて服紗よりむす鏡 人

おれもひ居る神子のあひひ 蕉

人まうしてやうと法座の匂ひる 人

初瀬よ乾る堂のこうと隅 蕉

何しき浪風のうらな中に 人

恒穂のさくけあつてなれて 蕉

おやふくねぬみ妹うらなぬ 人

何のそいの雅う酒はむそ 蕉

行方れうそのそを清く既 人

きぬともまきく 綴り居賦 蕉
秋の田代くせぬ事此巻にて 人
さししなうし 文字同にまゐる 蕉
いりりしと 尾尻の本業居 人
馳をとり子の瘦てかひる 蕉
花のころ 懐きあうもうらま 人
田小しを 滄うて 腥さ口 蕉
柱曆

苔翠亭

越人

力出ハ行燈清さん 産まうれ
朝夕うらふ け本牆のひよん 苔翠
け君と名なつて 井れあはれて 人
すけり行の かのイロハあひよ 反古
浦うら声よ 雨もつほくき 蕉
夕暮

手五

よもれとのそく山のま刈 匠若
赤くたく 煙のうけれ 淋しそ 依也
女房もこれ 田主もこれ 人
算とあうらう ところ 恋れあ 占
瘧おさえて あうら 蕉
やと止ぬ 雪の戸めうて 物さる 翠
さし 跡 たる 曲舞の 章 菊
秋風 やみ 狐持 ぬえの 表 人
谷の 産の けら けら 月 依
けり 丁 後 まで 一羽 跡 菊
仲よ ぬえる 敷盛の 塚 芥
産人の 尻中に 花の 咲けり 菊
酔うて 牛より 落ちる 雲 蕉
鹿島紀行

百葉よるに新秋にそよよ
流うりたる稿とてはを根 越人
月夜日海をたふよ 藤原しと 芭蕉
まよ玉子とぬきむふとらり 苔翠
わつらうとわてさう 元雲丹井 友五
とつるまぬう 帯たぬる 夕菊
市内して 藤原しと 名といふれ 依々
泥 泥 泥 泥 泥 泥 泥 泥 泥 泥
たふまの火ふおとさうま言人
瓦ひさう小掛ぬる 月 風
吾と何も小人と引とらて 翠
ろくへ負たる名取の貝 五
音のう小あの個子やううん 依
小社もれ出るやま 藤原のいぬめ 風

草子六

後後の洒泣ハ夢涌よる人そよ 照人
英一ハ子の孫と睡 夢て 蕉
里まを死花の本陰ふさうふ焼 五
たはるく蝶のあま 笠と入 菊

鄙懐紙

左柳亭

芭蕉

とやく笑け九日も近 右ね菊
くくろう死たけ 青月のあ 左柳
新島去年れうつ け啼^{イニカ} 路通
そくうとくしと山のくさけり 文島
酒吞の癖と陵子ねめたうる 越人
ふふあうくくも文とねいそ 如行
足の裏ふく 賦りぬとめたり 荆口
年故問きてふと海波うぬ 此篇

或人の書にんやぬら舞 木田
けつり 雛又 精をこすろく 残香
どうんしと 灸とろく 此とろく 出 曾良
書物の内の虫とろく 枕 斜領
飽果し 核もけとろく 悪し 柿
齒ぬけとふまへ 貝も吹れと 蕉
力きく 既中らつてかふるく 鳥
あつらつちる 夜のか 列 口
一捧又 かつらふ 山花咲て 通
陸とろく ひとむき 味 嚼 人
萬葉のとうとろく はろく 山 因
村とつらとろく 大又 退ゆ 嶺
新宮く 山御の 屋の 中らと 筋
二代上との 醫ハ ふうり たり 香

揚弓のユミするほとむい 良
鳥帽子かいらぬ 飯も 汚く 行
冬とも 了もの 是ての 大雲 神
茶のたてやうも 不 茶内ふる 鳥
美しく 貞生れつ かつ ちよ 人
尾又 生へき 舌の きぬし 通
有 新又 貝足とやら 城 透引て 蕉
萩とそ ねも 山一 採の 糸 口
何事も 盆 城仕 翁よて ぼか 筋
追ふも 連ふとろく 山 茶 宮 良
丸腰又 拾て 中ら 言し 死 香
もの 汲し 母の 尊とろく 因
花の 陰 鎌 会 屋の 草 まろく 行
梅山 吹まの ころ けとろく 高 嶺

十二夜

木曾のやせもやうにならぬ後力
行秋や文はひきまうふと布を
所命後や納のやうか酒五升
いとくみち雪えにこそふ雪を
冬くもてすくようそいふは

木曾の谷

芭蕉

生ぬくくいつふ出るなまこが
ほくけいふはふ寒き葉の 菰 岱水
代官のかこふにその力をそ 蕉
居風に桶の端を入ふきり、
酢の糟が捨てはけれりとい 水
々ふと狂んてくく次相談、

美

親の時こやうく一医者は若くは
狂ふべしりする候はくくく 水

香箸れからくくくく 蕉

猿こくくあふあたる白 粥 水

下さ衣城馬ふもふもふ 蕉

中箱の荒き狐くく風年 水

どこかまきまきくく 芭蕉

伝らねて玉一綱の露けき 水

能らまて村城なる寺の酒 風

とけておくれふ強き抱瘡 水

初花の汐伝るき春はを紙て 風

伊賀路のくくく山の裏ら 水

洗稿集

移風

雪やちちや雪の下ふる政中まで

かの柄よ氷るまぬくひ 首蕉
唐からし本かろく新にきりて 盆水
秋までよる鍋蓋の 蠅 依々
朝しハ布子松とぞ言ふ 曾々
扉して於る腰の 下 形 蕉
島守よま葉の孔とほく 岱
あうくむまはもこの洞う 野坡
后うーれ指ハ寺の林まで 杉
髪切切ても身を化りたり 公
焼うとる物又のむしを押し 蕉
貫ひよせしも茶に合ぬ水 良
藪とくは泳ようたつ霜柱 杉
出家よ物なまより上る 坡
お局のいゝぬちなる 野坡 良

手九

取り叶の湯のさめてけり 依
こつ花ハ蓬搗よふいそきて 野
堀の釣よ本にうくひとの鳴 執業
道人よあつたねもろくはれ

元禄二年

元禄小田毎の目くそ意ハハれ

伊達衣

陽炎の我肩ふたつ身より 蕉
水初くくふをりけり 蕉
拙う屋よ獨活のあえ地泄えて 塔山
身いりりそめよ猿の腰掛 此節
いさういし何し急ふにゆかり 良

くろみ孤かくんお夢の秋蕉
萩原ハ露マぬれても面をい
眺みけし拂ふ仇の松明山
五月やうし小袖の綿も抜あ寺
落たる髪成と死揃へはく
急ぐれてくみ今も物色山
ほそく書くるるの優れた
盃成そくくに火燧とをて良
年寄いひとり目付つとむる蕉
色かきも夏はふりとと吹はる嵐雨
相のとうたつ具陰の家山
旅車ぬるひるーハ月と花良
浪ハうすこの不二と動くは
客よひて汐子なうれいへ給蕉

卒

たまはるくあちのむら良
城北のしつ雪暗る養ぬた山
起て火成吹く種つれり妻蕉
りえり迷ひ子ぬる望月夜蘭
らんて晴らせハ麻登るく山
山風よとこひー、とある栗のい良
黒木ふとくる谷陰の小屋北観
たり娘と身とやほらせんお思蕉
あしおの百合と洞くけつ蘭
狼の自きてぬるふみの力嵐竹
水の思をよ佛作りて山
まゑるうし飯坊の温泉の熱う蕉
たひねりひたる園のうち物良
何ゆきま人の送者と身成下で蘭

膳も居れど鯛の後焼山
一門の茶もえころものさめに
イニ... 鯉
孫成つてうる孫政の筋竹

未来記

草庵に拙さういふ門人
其角瓦雪うり

とま

両のよは拙とさうや草餅
孫又訓一傑さるの児
野屋敷の丈繩もゆるい協流
山のあましくこれ薩中であり
糸下は有毛の弱のほう
風ひやくうにささしくの雲
傍輩に相撲の赤身たつれ
帯はころもに合れたらふ
麻玄と初傲とりぬ南無大
角 雲 煮 角 雪

李

豆前仕の命入育され東風
酒さす扶よかほそ記香丸
剥やとつろ人老の紅表
肩軍功者に引てゆりあり
ふらひひさるる男の明方
見そくと故念へ這今力の友
菴の雜あると啜る小雄麻
一通り彼岸の花の咲ちうて
日永よりくる暖縁や太泰
あはれかよ綿子えん弱法所
市医者やうたに伽流まろく
眩眩浪のしと追まじし
提灯をさる町のいたは雪
女房よふ木屋の亭まよやとて
蕉 角 蕉 雪 角 蕉 雪 蕉

高田の喧嘩とやむりく角
夏まきた罪の孫とぬさ家し 雪
たしふた風のる葛へまろ 蕉
牛のみれ牛よせり々市井用
白湖披露の田舎六天 雪
どけらうと扱よ月夜舟遊ま 蕉
いほくとやうと時のはらん 雪
糊たちた四手打葛のく衣角
とんどのひる男足才 蕉
一まはに戸城ふさがる小高ひ 雪
みたらし汲んで井の門前 蕉
棠へよと未未成地花の陰 角
三人よりよまこれ日うし 雪

菓子分四よ芥子人形やう花 其角
枕の口や梅ハ笑人おわらひる 嵐雪
杉風ふきまゆる

草の戸も位くつる扱を籠衣
飾り
松しよや名にとめられぬまは松 沾徳
松しよや松うけふ二人ま死人 素堂
千よま

りまやまの写真の眼いふこと
日笠山
あははくと青葉ついで松のえ
柳をてくろ松いよ衣うく
郭えうとまは流のうへて

雪丸け

奈原松亭

秣有山人と技巧のふたれ

芭蕉

育れ後子成るを推の紫

翠桃

ひるに市のかりを吹かて

曾良

町の中ゆく川をのり

蕉

白のふゆに居れく

挑

秋草経く惟子ハた

良

ものいハ麻子に血が

蕉

〜〜れた髪のつれ

廻輪

尋るに火が焼付る家

良

盗人ころに二十六の里

挑

松の根よ茂かあへて

蕉

雪ろきふて連分

挑

本三

蘇名所のあそとけり水野の炭俵

庭くころく尼たちの家

あけ方も急ゆたに

綿襦のめりく花の憎うり

たの羽よまう蝶の輦

日傘さけ子も拵ふて

衣成をてふる世中

酒のりい谷れ拵木し

拵人うへる祖の

拵者者の聖の互同

拵林の透岩に木

月中の寝つゝ

一登の茶

良

乞食とも去りて浮世の物語
洞の地花よこもるあり明
昔のまふハ猿の洞も深うん
流人紫薊る秋風れ青里
うも中よこ朝日みおむる空
まよとれちうらな海の白浪
幾のちれまうとてて翻良
真の風雅成およそつく端
玲ろれり柳花小田置て秋鶴
珠生ろれろるまの海月里

きんぎょの奥一佛頂お尚の

山居のたより空摸の五尺よ

ねらぬまのうはむとまもこ

やー雨なううせいとま

えなまひーともあれハ

木啄も菴にちふらんら木立

ころのこころに白紙をれて

空を摸よこもひさし向ふ数と

ほろも像まみ柳ま

田一ぬうとてまら柳いふ

白川軍

弁花かうにしに雲のとれと部曹良

袋表紙

岩依相良侍を島亭

風流のほしめやれれ田越うこ

手板を子成れて我やまけ州

水せめて登る藤のるや燕らん 曾良
 登る 蘇カキの声 知とあり 蕉
 一 登りて力ふ登れま川柳 窮
 雁カキは屋根ふく村を秋より 良
 舟の女う上 弦念仏に茶を汲て 蕉
 世はたのしやとそとむか物 窮
 或時 憚りも夏の入りぬらん 良
 撞の小枝よ急が備てく 蕉
 うらまての 踊り烟のふく 窮
 不イマ我ふる山や白髪ねもうけ 良
 酒登の軍成送る園よ来て 蕉
 秋と一する身とおうし 信 窮
 更る夜の登つと破る麻の角 良
 島の所伽の泣ふせる月 蕉

本五

いらししのいのり 成花に露めて 窮
 かふーおみぬはかく系は 良
 ふらけ尾よねく車やむし 蕉
 せり揺るる 清水冷と死 窮
 二載ひく雪舟一とちれは有て 良
 ねのく 武士の冬このり宿 蕉
 巻とくぬおゆへ急の世に念 窮
 登るるまーうた名取し 良
 まねは細腕ととー入て 蕉
 何やう事のならぬ 七夕 窮
 住うへる宿れうーら力成と 良
 かくれあうらむ 六条の髪 蕉
 切志きみ技うるけ 撰妙 窮
 大山はくえの声をきく 良

淋しと湯ちりともまきみは
殺生るの下はしるあ窮
花をたれるにむらみ道守た良
酒のゆいひの醒るころ風蕉
六十の後こそ人の睦月おれ窮
蚕飼とろ家小小抽重ぬる良

伊達衣

素門可仲い栗のふうけに居候
むとく栗とらふふ字の西の本
とて西方津まははとて行基
菩薩の二生たも縁は本は用い
まはとや

かくれさび月たぬたむ刺の栗
やれよほとろけとぬるあ母
切り萌と山の井の名い有あれて
畔侍いとるれぬ 橋 曾良

多と書しとる栗と月とこの栗
あはねたりとふ栗に月れ暮りて
イ昔年の秋いひくさひ 須等
秋あつとろの縁をくれと
あつとろとあつれ羽のあつれ
新虫か讀る曉の 声 蕉
松齒乃采ふ吹よけりるあつれ
酒の送根かひとろあし 窮
聳入の准よあつてとつとれ
これと送とる傾極のあつれ
を貢と孤神ようしとつとれ
力のいつとれとつとれ
括しては魚神かおしとつとれ
望の望かすりあつれとつとれ
梅あつて初瀬やあつれとつとれ
かとろと谷の松鼓をりく 良

あろふしにまぬきしころも聲
あやろふれぬ思登とくれ
ゆと雑飯とくる年の夏しれ
かへー冬うの膝やれもたき
うた、床の夏とく^いた^ち市^ちは^ちは
朴とかたろ市の生 醉
行僧に三社の院城いくれて
系合休てしめつうの後
伽又ある崎鴨の餌とまとい
四五日方ぬえとる巻のを
ち一付てりいふと^い里^ち切^り粒
麻の音 経てあふせぬ村
冠ともし^{イニ}所^ニと^くく^くに^は流^るれ
う^{イニ}川^ニく^くく^くく^く文^文成^成く^く
窮 蕉 良 雲 齋 窮 良 窮 齋 義 竿 窮 蘭

七

まといの世ふると人ふく人 蘭
まもせせせせハ一きく夜のた 齋
入り口の四門は法の花の山 良
法とめぬこむる遊生の宿 雲

志のよの里あふよま^ま持^りる^り
早苗とらふま^まと^とや^やい^い 志^志の^の持^持

佐^佐良^良衣^衣可^可う^う旧^旧法^法の^のち^ちま^ま
源^源家^家の^の什^什物^物成^成拜^拜す

貧^貧も^もた^た刀^刀の^の五^五力^力に^にた^たれ^れ身^身儀^儀
貧^貧も^も山^山の^の五^五力^力に^にた^たれ^れ身^身儀^儀
く^くて^てや^やう^うて^てれ

貧^貧も^も山^山の^の五^五力^力に^にた^たれ^れ身^身儀^儀
武^武後^後の^のお^おも^もせ^せう^うせ^せは^は橋^橋也

翠白うねるはみどり

揚より松ハ一本と三月とし

松を

松しやや鶴よみ松をれ歌と 曾良

了録

玄まや兵いもつまのあし

卯花よ兼房と向う白をれ 曾良

五月雨のふつこのこしや光堂

尿前集

冬風するの尿とちぢると

尾花はは風耳

そくしそふお若うてねやるこ

這出ようひやう下の暮のしあ

よもくれをゆりしてみの花

茶

春竹する人の衣代のすうこれ 曾良

念ふち

采とや思よまゝ入坂の声

新名風流亭

みけ奥水室たつぬる柳これ

雪丸け 風流

卯たつひの秋宿せやうやれ樹 芭蕉

くしめてかとう風の薫りの 孤松

多葉作り嫩よ蔭を折とへて 芭蕉

雪をかくは虹のしとこと 芭蕉

そくろある方に二千里隔はる 柳風

馬市きれと弱むくせん 筆

雄気たう父うりふはたしつ 蕉

筆くろくろとて判紙とてむる流
 梅さうじ三寸もやじり唐瓶子良
 とたも紙上ヶて通と 燕 如柳
 三歌さうらう夏よ故に思れて 木端
 侍の青さうくも山の墓原 風
 雪さうぬまいたのれさうくも
 新瑞一々る猪のほよ
 りさう一乃松焼のふ社とて
 底あうくんとさうくくく
 交る花の今い衣紙とてさく
 かけらふととゆるをなれる
 たのくくくと茶紙挽せらるる紙
 果さうと悪よかり死さうやき
 抽香炉りくくくくくくくくくく
 風 松 蕉 柳 風 流 良 蕉 松 蕉 柳 風

ほとんの常風やのくくくく 柳
 花傍のいて小盆けえんと 蕉
 武士とたれいる 東西の門 良
 たのくくくく麻もなぐる夏紙系
 ぬ織よけくむ茸柄の力 流
 秋文て接子ふくくくくくくく 柳
 くくくく海せらるる波の谷波 蕉
 子あり故と年紙たつぬさうくく 風
 柳塚の裾よくくくくくくくく 蕉
 奉る供柳のゆりれさうくくく 蕉
 よこれてさうくくくくくく 流
 ほくくくくくくくくくくく 風
 ちくくくくくくくくくくく 柳
 雲くくくくくくくくくくく 蕉

うらひとく^いら^らり^ら 故郷^い宿^ら良
雪九け

大石田高野平た後亭

芭蕉

五月雨^いあつ^たて^て早し^き室上川
春^はも^も虫^もあつ^たふ^く船^は 杭^は一^は采^は
瓜^は畑^はい^さふ^ふや^ふな^ふら^らて^て 曹^は良^は
里^はと^ひく^くふ^ふ業^はの^は細^は道^は 川^は水^は
牛^はの子^はに^くら^らふ^ふさ^ふむ^む夕^は方^は言^は采^は
雨^はを^も重^はし^し懐^はの^は吟^は蕉^は
侘^はを^も城^はま^らう^らに^あて^て心^はお^しり^し 水^は
お^しむ^むと^ひお^く國^はの^は境^は 目^は良^は
永^は樂^はの^はふ^らた^た寺^はに^あて^て蕉^は
夏^はと^合を^もる^る大^は鳥^はの^は紙^は采^は
狂^はお^の香^はが^あつ^たと^とを^もら^らる^る良^は

幸

瓜^は紅^はう^らつ^たら^ら双^はお^のる^る 水^は
捲^は上^はる^るを^もく^くれ^れ見^はの^はま^まを^も采^は
わ^つつ^つふ^ふ人^はも^も告^はる^る秋^は風^は蕉^は
水^はお^のり^り井^はは^の力^はを^もる^る良^は
ま^のわ^らか^か折^はと^とを^もら^らと^とを^もら^ら良^は
花^はの^は後^はま^まに^あて^て花^は造^は采^は
絲^はを^もん^んい^いと^とお^おい^い山^は陰^はの^は塔^は水^は
程^は多^は村^はに^あて^て糸^はの^はま^まを^も采^は
刀^はう^らら^ら甲^は斐^はの^は一^は乳^は良^は
い^らら^ら垣^は人^はも^も通^はら^らぬ^ぬ泉^はの^は水^は
ま^のの^はま^まに^あて^て木^は采^は
星^はを^もら^ら梨^はの^はま^まに^あて^て良^は
集^はの^は遊^は女^はの^は名^はが^まま^まに^あて^て蕉^は
麻^はの^は田^はを^もら^らし^し塗^はは^の良^は

柴賣よ出て家路をくぐり
合致候 本陸と登れけり
たえく 鳴らばは日れ証
右口のまうと跡証うさう
よ葉漏れらみの系 合
雪もそれ原をけ市の名跡とも
跡掃の月袋まの 客
ふれ人と古き懐紙ふれ
やりり鳥の中う入 相
平はくとも月ハ越えり
山田の種といふまら雨
良 蕉 水 柴 良 蕉 水 良 蕉

花摘

六月四日 羽黒山本坊より
あいて長し

有るもやそかかといひ風の青

芭蕉

主

住不し人のむと人夏草 呂丸
川舟の隈よ虫が引きて 曹良
移のぶあしよ足あらしる方 釣雲
池水よ天もうさう村の言 珠砂
ことたと南も吹うちり 梨水
ぬふくていさも陰まよさか 雪
百里の標を波るの半返 蕉
山はくはらに城の記をいん 丸
芥持をくむ神 木の森 良
ふらふらの経志さひの若歌を 雪
豆うらぬぬい何とれく鬼 丸
古所とちんがしる標は丸 蕉
系よま枝よさうす 水
月えよと引起されて愧 良

髪めくるとる羅のつゆ
中川とろく太のたじに花おて
的場のと清く笑る山吹
春松経一七つのでれカ
汲ていたく醒井の水
足虫のこしやまも揚る
敵の門よ二枚の藤より
かき消る夏の地獄を
妻をとりつ山犬の
うら雪の縁のうれまの上き
温泉の香よ思ふう初春
鮭の音は狩着ふと刻
とかけしはるおとろれ
力の心ありしの風と骨に
良

銀治の火砂と指書の
あうろ相よん付しん
鳴子おとろく行藪の
盗人よはまそふ味を
いのりもつとぬまの
舌のさうれ小流と
言希止上るこもの
水

とくしとやふの
かきれぬ湯屋にぬ
湯屋山新ふむ及の
曾良

初菰集
崔岡重行亭

あつしやんは出羽の初若子

芭蕉

輝は車の音はとふる井戸 重行
 信濃の暮いそがしう抜たこ 曹良
 国跡生の末の三日 力 昌丸
 我親よあふかたなる探れ花 行
 総て故郷と付し内うよ 蕉
 山の塔よとことうそく帆が紅 丸
 蕨ふふと里いふとふるら 良
 栗桿は日毎の舟小食飽て 蕉
 ろれちうつは祈るふれ戸 行
 あつ推成母の記念ふ推され 良
 雀よのこは小田の荊そめ 丸
 け秋も門の板うし最きう 行
 赦免よもれて掲えらる力 蕉

三

とぬしおかふはし寺籠丸
 若の女はぬよものつけ 良
 婿入の花えら馬にうち懸て 行
 もしけ廓は畑又焼ける 丸
 金銀のまも一歩小改まり 蕉
 素良の都よ豆腐初ら 行
 け雲よえんはとまを金揚て 良
 麻卷ふうらの化頼うら 蕉
 遙けさ目成位後と荒茶紅 丸
 こましにむびくとせて 良
 千日の菴はひとふ小松魚 行
 鳩牛の売と踏はふは音 丸
 身い蟻のらふうとまきと 蕉
 とけてあけと女席あふ 行

あまのりちる力成り柳の空に足て
温泉かそく入る陸奥の秋風 蕉
初月のほろろたけり氷の極 丸
山を死能る宮の青くく 良
あま衣男にゆきさるころまで 行
けかき入るささぬのつと橋 丸
花の時鳴とやういふあまも 蕉
数よくのりしきまれ山ひこ 良
らつと心

出羽酒田伊東不玉亭

あはみ心や吹浦うけて夕涼を

芭蕉

海招らう破またけむ帆返 不玉
力出ハ岸を我から人酒しちて 曾良
民の電のけふる秋 風 蕉

吉

まろしき握かやりたる色 拓 玉
あらし色の玉成ふるうへを裏髪 良
を死能る精阿の春に冬ひきて 蕉
火成焚く数よ白髪を 王
海通ハ及もふたせめて切せり 良
松多たくる武隈の土産 蕉
草おおう一花色もはあひて 玉
ちよとこの針よねるあひと 良
此供して高かこ我もあふらん 蕉
けせれ末もえと一語ふ入 玉
朝つとえま毒帯ちれ鏡の声 良
くし命令と語のそ 食 蕉
からけらう花一葉あそ葉葉折て 玉
たほられ鶴の藤ふの力 良

とれいん木魂よおくまの風 蕉
とくこい流ふさやう山 飛 玉
別力うけつまほきたる並傳ひ 良
権おふさむる塚の 荒 三 玉
とけい家おすけさあを頼らん 蕉
あはさ寸衣おほくそふく 良
月まじらん雁お儀よ生置て 玉
かこへ湯と陳中の市 蕉
所薬いすら葛の奥はこへ入 良
小神袴と送る戒の師 玉
ふあいの母ふ似たるとなして 蕉
ふ美にいまへぬ家いられとも 良
赤良の京おつこたる古今集 玉
花よ封切る坊の酒 蕉

半四

常の葉残えとむる羽をひ 良
蚕種も動とて葎ふに取 玉
けりれた本が作りてゆらねえとん 蕉
ことふさきとて城このむ宮守 良

雪丸け

六月十五日寺嶋彦分亭

色蕉

とれいん木魂よおくまの風 蕉
とくこい流ふさやう山 飛 玉
別力うけつまほきたる並傳ひ 良
権おふさむる塚の 荒 三 玉
とけい家おすけさあを頼らん 蕉
あはさ寸衣おほくそふく 良
月まじらん雁お儀よ生置て 玉
かこへ湯と陳中の市 蕉
所薬いすら葛の奥はこへ入 良
小神袴と送る戒の師 玉
ふあいの母ふ似たるとなして 蕉
ふ美にいまへぬ家いられとも 良
赤良の京おつこたる古今集 玉
花よ封切る坊の酒 蕉

色蕉

春風や雨よ西旋うわりの花
は哉や鶴徑ぬもて海けし
象滔や料院わうの神象
海土のあやを板ささるる縁
曾良
低耳

~~~~この果成~~~~

はこそぬ整うりさこそあみと料象  
曾良  
春風や雨よ西旋うわりの花

並江津よ

又月や六月しつねの扱ふ似付  
左柳  
朝寄よ飯焚くつらき家て  
曾良  
飛雲の小舟のとせよる磯  
眠鷗  
のここと常いふよふ心成せは  
此竹

松のるよよほく供 徒 布囊  
夕つじ庭のしらふるれ葉 石雪  
たつひをを結うけ 水筆  
おとひうけぬ真成傳人あつ  
栗  
とぬしの場成起も出た良  
おししのうみれ品の指つて 義年  
鏡よりほる我ろくひのほ 蕉  
内はれは潮寄は力れは病だ 栗  
無引て来る大のふくさよ 雪  
庭うつととと知らぬ葉 衣 鳴  
たつと武人のふかの菴 栗  
花の冷其<sup>しら</sup>くられて星かきふ 雪  
蝶の羽をいひ 桶 燭のうけ 雪  
春雨ハ整利る足のかきさか 蕉

香ハいろくしに人しの文良

曰

右雪

星今宵昨又約牽てとほし

と考へし一き初刈の稲 曾良

瀑水涌まいそく布はとて 芭蕉

ひらたむかひ

控極て小枝よ花の名狐はるし也

るのしつりこの日ハ長閑あり 良

糞成虫雪車もねじり雪の上 蕉

一むら鳥人ふまてて 云 雪

金山や侘て小砂城拾うん 右

科のむら城臨陸の居也

うれたるの百首の奥の名とまき 蕉

七十七

松かーい荒てけししの音は雪

子城射させらる 穂の床 蕉

後刈者の後成ぬる硯水 右

往昔の力山又同たし也

接皮むく老のかしら秋を 蕉

竹馬まであられうた半熟を 雪

塩漬の孤村のうらををばへ也

信あれふれまはしき 右

かよふれ一地元の縁よえひて 曾

後城おろせる里の物 陰 雪

御借成多つひて花のよえに 蕉

才木城よりゆく梅のひこ生 良

戦後の武蔵の花女のいざな



やうつらに日暮しと

ひとつふたは女もあつち萩有

あはれに人々

己世のふかやふ入た八有破海

一笑の海

懐もろこけ我後あつち秋の風

女幻庵

秋暑きうらよふに料乳乳茄子

芭蕉

うらよふさうて秋の日の影 一泉

かよふもけの末よる次て 左仕

手置るふいふに村の生垣ノ松

嶽銀治の門城なうて握り青竹意

小桶の清水ひとも入りくれ 悟子

其

せうし生長せしも映れん 雲口

鳥放<sup>チ</sup>やるに一の栗原 乙州

詠あふふうと道あるに地し 如押

ともし消ゆをハ雲に出る方 北枝

肌をさすまさとあつち 曾良

とのうに本よけし 流志

二つをいさうふ泥中と縁組て 泉

さしめやうある圓の境目 蕉

糸うらて麻方小我流一衣 枝

あしたふむむきき心のち 口

まの戸の花ももうつら世を 浪生

細うめもあつち 良

あつちしと月ハつれなくも秋風

卯の年

歡生亭

長久

ぬまてり人もたうし書はれ萩  
 落うられ又すしにふく家 享子  
 力又とそ揃もも出と船上げて 曾良  
 干ぬくこひく成納りぬくこ 北枝  
 松の風直麻のまれいよめぬ 工蟾  
 雲いづへて馬の一むれ 志格  
 日成徑とる湯本のまも出あふ 斧ト  
 下戸よもこせてすれ酒持 塵生  
 紫の古れ鍬もちとれたり 李邑  
 瓦の地系又松うくとや 祝三  
 暖簾又鳥の声もる交り 夕市

七九

秋成とくむら穿雲の舩蕉  
 肌の衣女のこころとやうら 格  
 ろもぬとま化て我うく巻 蛆  
 よりわける本より鳴出は様声 枝  
 雷あうふ塔のふれはり 良  
 昔よとめい牛けくしらも只世お 子  
 胡窓こさゆる神の胡うは 邑  
 扱もとくく虫い声れぬふた 市  
 ひうを急る力れ市 陵ト  
 そめりわる花又柔けく迎れ 生  
 雛うる雙道たつひたり 三

燕歌仙

北枝

馬うりて燕いひけり

くふ形くくく山の曲りゆ 曾良  
力よりと角力小橋端ぬれて 色蕉  
鞘くくくくくくくくくく 枝  
青閑又棟のふくむ水の音 良  
柴刈くくくくくくくくく 蕉  
妻ふるひくくくくくくく 枝  
持女に五人田舎くくくく 良  
落かよふ恋くくくくくく 蕉  
髪ハ剃らぬと魚喰ぬく 枝  
蓮の糸くくくくくくくく 良  
先祖の貧乏はくくくくく 蕉  
有明のくくくくくくくく 枝  
赤くくくくくくくくくく 良  
あま風ハものくくくくく 蕉

全

志ろくくくくくくくく 枝  
花の香ハ古き都の町送り 良  
まはれのとせるくくくく 蕉  
毛宗さやまから新波の浪を 枝  
根の小鍋を出は并やだ 良  
まよらくくくくくくくく 蕉  
笑くくくくくくくくくく 枝  
はくくくくくくくくくく 蕉  
眺る人ふる人のくくくく 枝  
あはれくくくくくくくく 枝  
初あふ草花はくくくくく 蕉  
小くくくくくくくくくく 枝  
疵瘡の素名目永くくくく 枝

西に八里り枇杷つらるる  
 ほと長ふ仙女の姿たどやうに  
 あいぬをくゆる水の白波  
 仲徳々宇治のつらと打縁の  
 寺より伎をたのむ口上  
 程つきておはん花もあやうり  
 酸一集四三十一狂人とやけい言ひ  
 萩の枕九集八三十一おしちの夢仙  
 一泓りえくろる萩の枕の那  
 むしのついで言哉落縁の下  
 紙子もむら巴かきつ流れて  
 づしにたむむぬれはうれ  
 極木系ハ樹木ふ新哉かひく人  
 食のそくやぬ事ハおほえん

菊夕  
 白之  
 残夜  
 芭蕉  
 曾良  
 路通

肌ぬきて人おえせらる夕陽の  
 児そくお守時のたけりし  
 たさあのりうりに條破翠履良  
 ほそねをうして扱菜どうひ入  
 養よ花もまるとく鳴よきうり  
 力えあかりし様のお衣未之  
 ささりしの貝拾へるる布ふとろ  
 地獄繪成なく極の衣さ  
 さぬししれ尻目に種と眠らん  
 妙々恒根ふふやむふもかけ  
 豆腐ひくろくさくやぬ御の祀  
 きの栗そくと住あけ菴  
 たさくさや落し甕をたて夕  
 あししにえるやうれ力星良

台まらりぬにまつむかれしは  
けろくまに方成きくもなる  
ぬまをたのむたより此の研  
様うたひにわかひまぬる  
さるゝ無野をあらうの世しと  
業ふつうう人よ絶す通  
田と穿つてゆひしもかぬ業の  
大吼うる森の入り口夕  
ゆふ方おぼえたりしは死法で  
そろしき定る秋の炭やれ  
谷越え新酒香とよとるあり  
くや辻堂のうらぬ棟上々  
うらむれて疫病送る朝け  
まもかへけし一かこれほ  
蕉

夜をとよて近うさるゝれ何  
夕  
胡蝶くくく 正 の 新 筆

左田の社に於て実徳の甲  
強れされ成りて

むらんやれ甲のこれよりす

山中温泉

山中やうきをぬ湯の白ひ

幸しくぬる成つて

松の木れをよまちし秋の風

さるるよつううと

今日うやや生れ清く人々の家

ゆきしてたふれぬも病の京

曾良

全思寺

危掃てさるや寺よまぬやぬき

よもすかし秋風さくやう山 曾良

山校いふよ

飛出て扇ひささく余波くれ

三子神社

有清一ぬしのもてるみの上

名月や小島日和さめたる地

徳の碑

月いつと鐘はいつるる海の底

如取子社

笠居て木のこ草むし拾ふ

本因亭

かくれ家や力こ糸とに田之反

如行亭

やせあつゝもくぬかふ葉はつゆ

千鳥掛

糸足つ才の就宅成賀す

くせと

うさぶや雀うらうらふ脊たの栗

蒜よえりる冊る葉 萱 糸足

なげ涙を畑の編摘きりて 安信

風呂焚より力のつけほの 蕉

枚垣のちあふいととれ鳩声 足

とくまお下りて紙子拍つく 信

いせの辻えぬんとて

恰の二見まづつれゆく秋と

そとさうられ押あひぬ赤はま

長尾時

初時雨様も小夏の萩はせ

多胡碑集

つこ子もけしきつらん玉雲

芭蕉

お姿よまき文にり水仙

良無

羽帯の風やむ襦又軸まて

指風

唇をむひらむ月の狭途

之園

簾の声を裏のかりよれ衣る

古茅

さうしく流る雪のとん栗

半残

鶏既の空ふたえよ打とれ

品

その喰うちを蝶のうらるる

蕉

左ねうり麩斗舟に佐海幸うま

園

流りれ多とけよ雨のよ松

風

多減志のひし小汁みて

浅

分

袴もろしてとや列きりり 芳

馬の音傍雲まのとりし小 蕉

か入こふふ不二のいつく 風

秋うせの簾ふるいせと出て 品

簫ふとりりりる萩の山雀 園

魚いされい糸にぬる花の笠 芳

羽織もろしくまの糸よ 蕉

楸立て耕を肩とるやとめ 風

首の元たり頼朝の 蕉

お雲よまき下れ句成出り 蕉

そよ事言り奥助の客 品

苔生し君の卒塔婆ふはこれ 園

林とられよ松入葉の戸 風

床る時も訓まの安んじけ言 芳

風雅仕上り酒のそれ身子  
世の中ハ穢暵界なる徳衣  
品  
・たるふれハ佛切たき  
残  
福隣焼ハ月夜修りしこ  
風  
僧の盤刺る盆の夕暮  
園  
ふさふさかぬりごと踏まて  
蕉  
巻くくまとき時よ網とる  
風  
生れ来て煙草のやぬも此樂  
品  
去く髪かうらねおまうら  
芳  
左義長のちろこさよりたは  
残  
かつらふく雪よ及とつる  
葦  
園

あしこし

金屏の招の古ひやそり

お雪やいつ大佛のけらま

徳酒堂

浪花津や回すれあこもそ

きりうれあこもそ

ふくさめて

といつく梅とんのまこり

落柿舎

も嘯の墓もあつらう神と

帯ませせふ似てもせん神  
来

何よこれおきの市にゆく鳥

え孫と年

薦がたてて待人いすん花のち

写とめ

暗や屋のねくものゆりあは



時どくや花かこふる捨る園

二天の曇みぬく

くくわうれうーはれははは

俳諧集

太神宮法樂

何の本の花もさくは白うれ

と云

声よ朝日然含むうらひ寸

益光

まきうれ葉の揺ち重く死て

又玄

二葉の葉所幸流り

雲菴

有叶の子紙と指ふ引つて

勝延

糸をさうたおのあう火

清里

約り掃ふ嵐のかよきやて

光

細めふる田の中れ寺

蕉

山路来て清水せれあ油の汗

菴

物入響成たのい悲ーと

玄

女のとちた即籠の破とこれ

蕉

甚と付つとて泪落ーつ

延

いぬうては酒とふはあひ

野人

陳のかり屋と傍のこりて

光

去らきらにのほきと存と致し

里

はしめてはるる圃の初稻

菴

漏る力城妙う操織る窓は

玄

藍のしみつく指くくそん

蕉

神役は雀さすまぬる淫連

光

返寄ふはするさぬの侍

人

急茶と沈のちやめ成打ぬて

延

水鏡と追よ記ー

曉

玄

多葉粉吸く毎の経緯はる 港  
雅う系あそをわうらさそ 里  
あこつあ、樂の一子、成、秘、えて 蕉  
釣りの玉子の浦いさひり 光  
声、之、く、舞、表、は、張、る、秋、の、蝶、 玄  
去、ら、く、風、は、銀、杏、吹、ち、る 迎  
後、う、け、て、お、毎、日、方、成、見、歩、ゆ、 人  
こ、ろ、も、と、と、こ、も、あ、た、あ、か、た、 菴  
親、い、ら、る、系、よ、う、記、水、と、歎、づ、る 光  
ま、つ、り、と、た、凡、成、系、よ、代、ふ、す 蕉  
は、坊、成、は、し、と、き、な、か、の、あ、り、と、 正木  
ゆ、り、こ、も、こ、も、權、よ、み、殺、系、記、を、り 玄  
と、の、く、ぬ、れ、ら、法、よ、系、と、引、境、の、 巫  
経、冊、の、こ、と、沖、離、の、昏、人

一幅半

紙衣のぬるもおしむれば

芭蕉

と、と、と、と、や、り、汲、水、の、あ、ま、ぬ、る 乙若  
酒、壺、の、取、と、の、挿、よ、蝶、を、て 一有  
板、屋、の、の、や、う、ふ、ふ、ふ、か、 杜園  
ゆ、ら、暮、の、乃、ま、て、傘、以、て、置 應守  
馬、よ、西、此、成、は、け、て、け、り、あ、り 葛森

○ け、末、芭、蕉、翁、の、句、は、と、い、は、し、り

稲妻のひらつてまれば、あ、ま、ぬ、て

聖中のこゝろ、ま、け、り、世、と、も、く 蕉

ゆ、ら、く、と、と、と、と、と、か、る、 郊人

命、を、と、ら、ふ、の、速、款、と、懐、小

汐、八、子、て、ぬ、る、文、と、く、返、る、浦

日おとれ習る茶城をひて、  
乞食年とる桶の本れ中  
聖一と丸雪ふるれ居とてつ、  
月希のけし記とて候詩ふ能、  
八つふふる子の氣ほけぬり、

湯を中茶畑の系れす星

花垣の底いそのうとてなまの  
やとてくこの斜まつけん  
つるとつひほつとめねれ

一里ハとれ花吉の子孫と中

ふとひいあかこまつ花さうり 去来  
中を雀鳴中の拍子やねの声  
蛇うよとさけいねほろほしけ声  
呂丸をよとむ  
宙ゆよりちりれい塚のすし家

巳の光 土色  
種芋や花のさうり紙賣あうく  
火燧ふとけハ風こころあり 半残  
酒好のかしらもほりけまらて 土芳  
ぬたえとと死草の衣 女 良品  
有明の七ツ歌あつ茶院又 残  
ひとこの札と附さうり 蕉  
うら風よ桂のたごちる 藤合 品

小傍の舞又口こくへとろろ 芳  
 やとくと英洲のはるけの傍 蕉  
 多賀の杓子もつ川のとろろ 残  
 手松のともともおとそ三編組 芳  
 人よとろろはく甚名口をし 品  
 萱州のまもかりぬ忘とそ 残  
 秋たけの蟬の啼死ふりり 蕉  
 かくまてる屋根まゝ風の音 品  
 こはまて青た藍瓶のあ 芳  
 けさつけの花れを懐は懐とそ 蕉  
 後のつる来る水のつりえ 残  
 猫れ眼の六ッ掬<sup>カキサキ</sup>核に四ツ急ク 芳  
 あそのともよひの鐵蘿蔔と切 品  
 からうとも病人あれ借とめ 残  
 芳 品 残 蕉 芳 品 残

たとそやいて出る髪結ひ 蕉  
 とろろに緋屋の形取取ちし 品  
 冬至の宴又お思ひま次 芳  
 化粧もよそいも思ふとそ 蕉  
 まとそえ後のいとあうり々々 残  
 初々なれしひのまを膳まつ 芳  
 いとありれからおくたれ尻 品  
 田鼠の指喰ひあはれ尻 残  
 風ひえそむる年の子れ後 蕉  
 露しとれ紙のまを紙とそ 品  
 死とそ人の竹よ来る一き 芳  
 外風や吹起されてかひさぬ 蕉  
 筆紙落せし鳥鳴出す 残  
 芳りくとひとの花よ指むい 芳

長宗よ昼の大鞆うちうり品  
ひさこ

花見

芭蕉

本れもとふけも給もはらうり  
西日のとつ小能天まきこ  
総人の風うれりまきこ  
それもあうハぬを刀の鞆  
力まらて假の内裏の司石  
靱白はくろ拙く色こそ  
鞆並るよ葉駒は秋のまで  
名いさめくにほり替る雨  
入り込は後訪の涌湯める春  
中よもせいのかれふ伏  
つへも城唯一方へあけり  
硯 蕉 水 硯 蕉 硯 蕉 硯 蕉 硯 蕉 硯 蕉 硯 蕉 硯 蕉

ほそれ筋より急はつう  
おれもよふお冷てせられて  
力える魚の神おもと  
秋風のぬとこはるかそれ音  
丁けうとや白子若松  
千歌よむ花の雪りの一身田  
巡礼死ぬる道はけり  
何よりも襟けつそはれ  
みかくほとのかさか  
羅よ目城いとそふ御  
態腫るうれと泣はひ  
子来り紀の宴ちり顔よ  
酒てらけらるはらぬ  
双方の月とのそくちり  
蕉 硯 蕉 硯 蕉 硯 蕉 硯 蕉 硯 蕉 硯 蕉 硯 蕉 硯 蕉 硯 蕉

わづの持佛よむり入念仏 碩  
中しに七間小居れい昔もは 水  
我名八里のふりりものく 蕉  
小くすれていしぬ痛の肝と葉 碩  
力おしくよ明らるる 力 水  
花とくぬちやう 拓かう 拓て 蕉  
たう四方なるまをるのあ 碩  
一夢人の修むつしと返り 水  
医者者の業い飲ぬふら 蕉  
くれ嘆い芳時たうてん 水  
地よとくあまれ山中 碩

虫見

本らるえやぬれ勝してまふ

在

雲のおや子もは流るる 凡兆

幻住庵よみ

えたのむ指れ本もありま本立  
ほくよは北中そちふりし 曲翠  
雲とく入るの上も苔のそち 乙州  
ういも胡もつた凡の花

信ふゆく人よ

柳のやううもてまよ 津田 碩  
くつさめの泣きつうと夏の山 野水  
海山よ五月あそよや一らしと 凡兆  
新道記岩梨をうれ猿れ是 千那  
細粒のやとら亦や、夏の山 洒堂  
郭云のやぬ水のさくはう 犬子  
とれしとやとも小糸う推か 如行

紙帳とらうて

おもしろく安帳おろけとあつり 野徑

麦の粉とらうて

一袋これやま田のこゝま 之道

五ヶ月迅速

早くて死ぬけし死にまへに候けしと

俳諧集

大津奇香亭

芭蕉

いろの雨のふりぬ眠るをるか

せめて涼しけきるの青 奇香

く川方の氣を察にたふして 尚白

石よいこのくさひくあり 自笑

松の本成秋風とそく折くま 通雪

松成やゑんて琴の糸より 松洞

うかれたる女ふふれて目の積る 香

矢敷よ藤のよりの意くさ 蕉

ふも塚よたつの文紙控ふり 笑

物の棠しりまか 白

中々言ぬまより出て雲より 白

浮世の弁れ清きより寺 洞

ありし吹きをちとる方二つ 洞

杖を捲よ麓のまの 白

箱毒に時し社舞まわて 蕉

横しぬけ方の汗を流るく 笑

花紙をくまにわんはるるや 白

雨よ肥たる峯のまよりい 香

麦飯よ雪よりくさねん 雪

されたる雲よ龍の音けり 山  
 その一木の幽よつる松の枝 香  
 出よしとてさし入ふのゆゑ 官江  
 左心のさふて悲しむ龍田の墓 一龍  
 追つれて麻の子と捨てし 蕉  
 中の秋暖涼ある竹杖杖がら 雪  
 三線ちりり萩と踏おろる 香  
 うと人とを答へし儀る方おろ 白  
 大勢うつて拵られたり女 香  
 一糸巾二糸はさうけ袖より 侗  
 雲のよきこれ比叡の山風 白  
 こころしとてさふふれし音 江  
 菌采ひてあつて帰る夢う道 雪  
 酔ひぬけ伯父の面をいささか 香

九十二

旅の妹ら子成産ふ来ら 龍  
 機くむ毒戸小夜の帯と變て 蕉  
 よれた夏こころりしの初ま 白

俳諧集

芭蕉

まつ髪ぬく梳のやちりす 芭蕉  
 入日哉とくに西窓の力 之道  
 あま塩の彌うさへ杖の末に 珎碩  
 菊さくらたかかつしめれ 蕉  
 何風ふ巾の袋のわしと 道  
 麦のふらふひ城たたくをさそ 碩  
 舞込て一ひきうらつて 蕉  
 願はるゝ急聲の 道  
 とし織の帯うらひ服よめて 碩  
 えしと銀のゆかり 蕉



山云事の情のめり功氣道  
かふし谷より踊踊となり  
力氣よ冥の苦毛紙追うけて  
細もさつとも端とらうに  
このくとも布子一二枚に重たき風  
すこも弥生のみ貸たさる  
時し小花もほさる新畠  
昼よ柔くくしてを雀うこく  
碩道道碩道

合飲の本のまろしむと星ぬけ  
草の戸をまれや穂夏に魚は  
相の本よ熟吟なる堀のうら  
おれしろう松ともえよ海有歌  
土芳

卒四

笠田

病了のぬきをたれて揺ねふ  
張りのなしか海老にうし  
時あふ一回のたつ採のころは  
木枯や顔もれいむ人のな

智月亭

少おのたのたれや志望れ雪  
外雪のこころや志ゆる草  
おむる屋のまはみ  
乾放のころころけつる  
はまをたや鏡のこられてる  
智月

猿蓑

きつれぬも刷いっつらひぬおらふ

去来

一人風の木の葉も山より  
 股引の朝うし信う川越て  
 たぬき成怖と陰張のり  
 海へ下るなまき運うち  
 人うもくれそうんおの  
 書ふふらう書後まうう  
 何事もをまのうらふ  
 里へんえそちて年の貝  
 ぼほもてう去年のねこ  
 美草の花のころりくし  
 ぬあひう山出来されし  
 乙里あやうの道こくも  
 けまの盧同く男右あり

芭蕉 九北 次部 蕉 来 部 北 蕉 来 部 蕉 来 部 蕉 来 部

さう本つきたる月の掛  
 昔ふううの花よかうう  
 ひらう燕りし今朝の腰  
 いらこれよ二月れのも  
 雪まよまきと語の北  
 火とほーに言れぬ覚る  
 ほくき度いふ啼は音た  
 瘦骨のすこ記述る力  
 隣城うて車引こむ  
 うと人を松穀垣うら  
 いやうりうこの刀さし  
 せかいけは擲て成  
 ねまひ切うみねひん  
 青天よ有明方の朝け

北 蕉 来 部 蕉 来 部 蕉 来 部 蕉 来 部 蕉 来 部 蕉 来 部 蕉 来 部 蕉 来 部

湖の秋の比良のゆき  
ほろひ年暮ま益きて秋とむ  
布子とちふ風の夕暮  
押合て睡るいすこきう  
たらのそこのやとふれそ  
一こちく教つらるるの  
枇杷のふらふよ木の葉  
邦

俳諧集

園風

あつこや雪かたぬく  
々うり花伝る指のま  
曆よむ人ふれ里も安  
かうり牡丹の名城ひ  
歌しふ方とらての上  
扇の角城はくを舞  
風

九六

春よあふ耐糖の鞘  
こ川非つよね監  
馬の鞍ふくてもおる  
おとあつと出は  
伊勢の海よこれ  
敵の首城たつる  
村人ハ岸の遠よ  
籍に門徒成るる  
造り出は今年れ  
力もる沙りのや  
殊うりや溝よ穂  
ふくまらふは  
そまの樂け衣  
出しかけたる  
芭蕉  
木白  
額  
配  
麦  
風  
考  
品  
残  
刀  
風  
蕉  
芳

このたよ<sup>イニ</sup>遊<sup>ハヒ</sup>とのほろも今<sup>イニ</sup>芳<sup>ハヒ</sup> 白  
 肩ふおぬる供のささ<sup>イニ</sup>し 額  
 残る雪男にんきん<sup>イニ</sup>里<sup>ハヒ</sup>つり 風  
 放て大の<sup>イニ</sup>取と<sup>ハヒ</sup>追<sup>イニ</sup>ま<sup>ハヒ</sup>る 麦  
 葬礼ふ<sup>イニ</sup>志<sup>ハヒ</sup>得る、馬の表<sup>イニ</sup>まり 品  
 女<sup>イニ</sup>嘆<sup>ハヒ</sup>とる井の戸の<sup>イニ</sup>うち 芳  
 後朝の<sup>イニ</sup>亥<sup>ハヒ</sup>子の<sup>イニ</sup>餅と<sup>ハヒ</sup>配ると<sup>イニ</sup> 菰  
 脊中ハ<sup>イニ</sup>ま<sup>ハヒ</sup>く<sup>イニ</sup>既<sup>ハヒ</sup>く<sup>イニ</sup>ち<sup>ハヒ</sup>ける 白  
 志<sup>イニ</sup>くれ<sup>ハヒ</sup>とる<sup>イニ</sup>猿<sup>ハヒ</sup>の中<sup>イニ</sup>志<sup>ハヒ</sup>なる<sup>イニ</sup> 額  
 子<sup>イニ</sup>成<sup>ハヒ</sup>ひ<sup>イニ</sup>く<sup>ハヒ</sup>る<sup>イニ</sup>猿<sup>ハヒ</sup>は<sup>イニ</sup>の<sup>イニ</sup>奥<sup>ハヒ</sup> 刀  
 顔<sup>イニ</sup>よ<sup>ハヒ</sup>と<sup>イニ</sup>皆<sup>ハヒ</sup>く<sup>イニ</sup>烏<sup>ハヒ</sup>帽子<sup>ハヒ</sup>傾<sup>イニ</sup>けて 白  
 さ<sup>イニ</sup>く<sup>ハヒ</sup>と<sup>イニ</sup>ら<sup>ハヒ</sup>く<sup>イニ</sup>や<sup>ハヒ</sup>旅<sup>ハヒ</sup>々<sup>イニ</sup> 袋  
 七<sup>イニ</sup>夕<sup>ハヒ</sup>に<sup>イニ</sup>く<sup>ハヒ</sup>た<sup>イニ</sup>と<sup>ハヒ</sup>か<sup>イニ</sup>た<sup>ハヒ</sup>る<sup>イニ</sup>涙<sup>ハヒ</sup>ふ<sup>イニ</sup>ら<sup>ハヒ</sup>さ 風  
 家<sup>イニ</sup>賣<sup>ハヒ</sup>り<sup>イニ</sup>て<sup>ハヒ</sup>世<sup>ハヒ</sup>ハ<sup>イニ</sup>あ<sup>ハヒ</sup>く<sup>イニ</sup>は<sup>ハヒ</sup>か<sup>イニ</sup>さ<sup>ハヒ</sup>る 熊

たよ

柿の本の<sup>イニ</sup>枝<sup>ハヒ</sup>も<sup>イニ</sup>た<sup>ハヒ</sup>ら<sup>イニ</sup>た<sup>ハヒ</sup>ま<sup>ハヒ</sup>と<sup>イニ</sup>持<sup>ハヒ</sup>て 麦  
 花<sup>イニ</sup>て<sup>ハヒ</sup>と<sup>イニ</sup>と<sup>ハヒ</sup>ゆ<sup>ハヒ</sup>く<sup>イニ</sup>名<sup>ハヒ</sup>や<sup>イニ</sup>の<sup>イニ</sup>ま<sup>ハヒ</sup>る 芳  
 修<sup>イニ</sup>り<sup>ハヒ</sup>者<sup>ハヒ</sup>の<sup>イニ</sup>踏<sup>ハヒ</sup>ま<sup>イニ</sup>し<sup>ハヒ</sup>た<sup>ハヒ</sup>る<sup>イニ</sup> 額  
 如<sup>イニ</sup>斗<sup>ハヒ</sup>の<sup>イニ</sup>星<sup>ハヒ</sup>は<sup>イニ</sup>は<sup>ハヒ</sup>く<sup>イニ</sup>む<sup>ハヒ</sup>す<sup>ハヒ</sup>く<sup>イニ</sup>さ<sup>ハヒ</sup> 白  
 唇<sup>イニ</sup>の<sup>イニ</sup>肌<sup>ハヒ</sup>あ<sup>イニ</sup>く<sup>ハヒ</sup>り<sup>イニ</sup>さ<sup>ハヒ</sup>く<sup>イニ</sup>啼<sup>ハヒ</sup>ぬ<sup>ハヒ</sup>人 残  
 松<sup>イニ</sup>ハ<sup>ハヒ</sup>一本<sup>ハヒ</sup>ふ<sup>ハヒ</sup>の<sup>イニ</sup>枝<sup>ハヒ</sup> 風  
 乞<sup>イニ</sup>食<sup>ハヒ</sup>して<sup>イニ</sup>花<sup>ハヒ</sup>よ<sup>イニ</sup>ま<sup>ハヒ</sup>た<sup>ハヒ</sup>る<sup>イニ</sup> 薦<sup>ハヒ</sup>す<sup>イニ</sup>れ 蕉  
 雉<sup>イニ</sup>子<sup>ハヒ</sup>し<sup>イニ</sup>ふ<sup>ハヒ</sup>そ<sup>イニ</sup>怖<sup>ハヒ</sup>い<sup>イニ</sup>る<sup>イニ</sup> 芳  
 春<sup>イニ</sup>雨<sup>ハヒ</sup>い<sup>イニ</sup>よ<sup>ハヒ</sup>く<sup>イニ</sup>く<sup>イニ</sup>酔<sup>ハヒ</sup>の<sup>イニ</sup>ね<sup>ハヒ</sup>く<sup>イニ</sup>て 刀  
 お<sup>イニ</sup>も<sup>ハヒ</sup>い<sup>イニ</sup>ぬ<sup>ハヒ</sup>方<sup>ハヒ</sup>の<sup>イニ</sup>款<sup>ハヒ</sup>冬<sup>ハヒ</sup>は<sup>イニ</sup>は<sup>ハヒ</sup>む 麦  
 け<sup>イニ</sup>こ<sup>ハヒ</sup>ら<sup>イニ</sup>い<sup>ハヒ</sup>人<sup>ハヒ</sup>を<sup>イニ</sup>焚<sup>ハヒ</sup>か<sup>イニ</sup>り<sup>イニ</sup>入<sup>ハヒ</sup>独<sup>ハヒ</sup>と<sup>イニ</sup>こ<sup>ハヒ</sup> 品  
 家<sup>イニ</sup>主<sup>ハヒ</sup>の<sup>イニ</sup>末<sup>ハヒ</sup>て<sup>イニ</sup>瓦<sup>ハヒ</sup>色<sup>ハヒ</sup>の<sup>イニ</sup>名<sup>ハヒ</sup>を<sup>イニ</sup>同<sup>ハヒ</sup> 白  
 引<sup>イニ</sup>り<sup>ハヒ</sup>つ<sup>イニ</sup>く<sup>ハヒ</sup>あ<sup>イニ</sup>や<sup>ハヒ</sup>り<sup>イニ</sup>け<sup>ハヒ</sup>階<sup>ハヒ</sup>ま<sup>イニ</sup>ね<sup>ハヒ</sup>た<sup>ハヒ</sup>け<sup>イニ</sup>に 芳  
 目<sup>イニ</sup>の<sup>イニ</sup>葉<sup>ハヒ</sup>ふ<sup>イニ</sup>の<sup>イニ</sup>て<sup>ハヒ</sup>と<sup>イニ</sup>と<sup>ハヒ</sup>く<sup>イニ</sup>く<sup>イニ</sup>夕<sup>ハヒ</sup>暮<sup>ハヒ</sup> 風

力れあきつゝし 教うらひ 蕉  
悠うらひし 急のいさかひ 刀  
壬生山家集

みきよよりやふ斗の早け前

百歳

笛の音こぼる 曉の橋 式之

一はういひ 雀のまこ 藤る松たて 芭蕉

まじりて 菊し 田面 逆けし 豊牛

盃の名 城あつた 人言 村 村鞍

腕押 伝ふ 兎 香の 衣 槐市

若殿の 簾の中 け 丈 梅額

素良の 小孫 眞も 宿に 下りし 蕉

挑灯と せと せといひ 陸 牛

紙衣 羽織と せと せといひ 牛

滑し 成 又より 人よ みきて 百

五八

ふるき 名 深の 志と 市 額

有 响の 匂 ち 鴨 又 餅と せ 市

米 匠 くら さら 青 山 秋 村

こ かな けいひの 緒と 作 又 せ 蕉

瓶 ころ 又 係 へく 出 せ 白 糸 之

杖 つと せの け れ 坊 々 此の 揚 額

空 あつ つか 又 け せ 息 せ 百

ま くれ きて 猿に 小 唄 又 歌 せ 村

お 茶 又 簾の 展 風 又 昼 又 夜 柳 子 額

面 う け 又 折 又 せ たる 唐 団 扇 蕉

夜 更の ころり 青 風 又 志 せ 牛

ま じり けい せと けい せの せ 之

ひ くる ころ 雀 義 くら せ 村

紫 賣の 市 け 傳 又 酒 買 又 市

明日の種蒔の月も晴たり之  
いふ妻よ舟漕からよ渡しを村  
あふけさやあおの級百  
子ともあつてはくさるあかあつて  
ちとけあましくくさる棟札之  
袴衣よ下衣の烏帽子成領し額  
幕成志は孔の皆けしとる蕉  
雞のうたふもくれの魚あれや之  
細うの波まもさる陽を市  
おまの射場やけんとり挽て百  
籠よはさるすまれ一ふと村  
物の親

上野寺と  
さ月ハ非成友と事と一と凡

色蕉  
九十九

きよ土民の供物納むる 示石  
水える芦のぬけけく産鳴て 九非  
園よ板こくさる表楫の声 去来  
ふきうくとふきう力の如人 景挑  
秋よ突おる虫食の杖 乙州  
實入よとと足級の早稲の赤と 史邦  
星近くさる馬の足 蹟 玄哉  
押さつて大ふられり多り 篠石  
奉加よ出る僧の首 途 蕉  
ま川や扉屋の土とふしあき 来  
たしたしと荆咲々り 兆  
洗濯よやといれ歩け給う業 州  
猫のいっよみの声も眼めし 挑  
上いさ下ハ志もととあ思ひ 蕉

皆白張のふきはあまらり 石  
 高麗人の名ふとんをる力とれ 邦  
 去の海辺は朝の霞 焼 邦  
 霞下り床たぬるに降る 北  
 雨はろしと南吹くあり 来  
 来岸隣つゝれおるり 桃  
 日残るそくして如るに度る 蕉  
 らく後経るおふる九十度 哉  
 ねさくろくして及る迹一たり 来  
 閑なる宮は後を枝引ちじ 邦  
 蘇麻の里のおとく急一とれ 桃  
 蒼雨のうらうらつたれ鳥鳴 石  
 野中よ捨る餌の有たけ 春  
 力細く小雨ぬるる地花 邦  
 百

世ハありは才芋焼て喰人 兆  
 萩と子に為成毒の家建て 蕉  
 あやの床をに小月入日の乾 石  
 泣しも小さき鞋は求めぬ 来  
 たもこの形の風は初る 哉  
 美白小舞衣とんむ花盛り 桃  
 衣はあへる鳥の羽をひ 邦

衣を縫もろくやのやせもまは内  
 系を出て乙州の新宅よ  
 乙州の東川とて  
 人又家残さして我が心  
 乙州の東川とて

わさとしはふり様やしの雪 智月

五月園

藏書